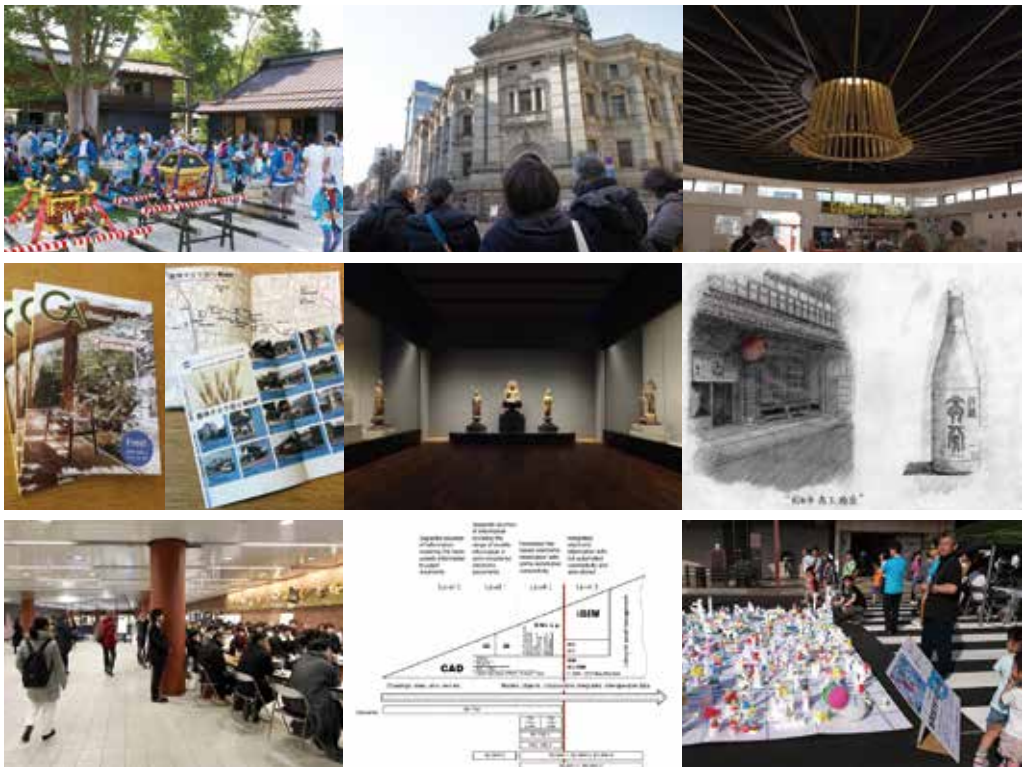
Bulletin 275

2018 春号



COLONNADE

第29回JIA神奈川建築WEEK かながわ建築祭2018／横浜近代建築街歩き

山梨地域会 美しいまちづくり奮闘記／群馬地域会 ここにあるタカラものを探し続けて

FORUM

海外レポート／覗いてみました他人の流儀／温故知新／バックヤードツアー

委員会活動報告／部会活動報告／地域会だより／日本語版CABEを考える／活動報告

JIA

公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部

関西ペイント販売㈱　開発営業統括部
木田敏夫氏

オリジナルの機能性塗料で地球環境や健康志向に貢献する

総合塗料メーカー関西ペイントは、1918年に尼崎市で設立し、今年100年目を迎える歴史ある企業です。自動車用塗料や工業用塗料、建築用塗料など、さまざまな産業分野の塗料の製造・販売をし、日本だけでなく世界中で事業を展開しています。建築分野では、付加価値のある塗料が求められており、高機能性塗料や環境配慮型塗料が注目されていて、世界的にも今後需要が伸びていくと考えられています。今回は、関西ペイントの販売を担う「関西ペイント販売」の木田敏夫氏に、オリジナルのユニークな建築用塗料を紹介していただきました。

消臭効果と抗菌作用をもった環境や健康に貢献する機能性塗料

近年、建築用塗料はただ塗装するだけでなく、生活環境を高めて健康も増進するような機能性塗料が注目されています。

関西ペイントでは、日本古来の壁塗材である漆喰を塗料化した内装用消石灰系仕上材「ALES SHIKKUI（アレス シックイ）」を販売しています。漆喰の機能性や風合いはそのまま、ローラーやハケ、スプレーという一般的な塗装方法で簡単に施工でき、さまざまな生活空間でご利用いただけます。自然素材である漆喰は、消臭効果と抗菌・抗ウイルス機能があり、アレルギーの原因となる有害物質も吸着除去してくれます。小さなお子様やお年寄りのいるご家庭はもちろん、喫煙空間や飲食店などの臭いが気になる場所や、病院や福祉施設・学校など病気に対する抵抗力の弱い方が集まる場所でも効果を発揮します。

また、「アレスムシヨケクリーン」は、室内のビニールクロスや塗装壁面に塗装することができる虫除け塗料です。近年、デング熱やジカ熱など蚊が媒介する感染症が国際的な問題になりました。こういった感染症の防止にも効果が期待できるため、衛生環境が整っていないアフリカや網戸文化のない東南アジアでも好評な商品です。

虫除け塗料「アレスムシヨケクリーン」
ホームセンターでもご購入いただけます

塗料に配合されている虫除け成分（ピレスロイド系薬剤）により、その塗装面に虫が止まるとその後虫が寄りつきにくくなり、蚊は血を吸わなくなります。殺虫塗料ではありませんし、人や動物には無害で空気中にも漂わない安全なものです。無色透明で壁の素材を生かしながら簡単に塗ることができ、蚊以外にもクモなどの不快な害虫にも効果があり、室内だけでなく軒天面やバルコニーの壁面、玄関廻りの壁面などにお使いいただけます。

ほかにも、外部に面した鋼材に対して鉄骨デザインをそのまま形として見せることができる新型耐火被覆材も開発中です。

PAINT GALLERYで実際に見て触って効果を体感してください

東京・大田区の関西ペイント販売本社には、新しい塗料の紹介や色の提案ができる「PAINT GALLERY」があります。100インチの大型プロジェクターでカラーシミュレーションができたり、内装の見本も2メートルほどの大きなサイズで見ていただくことができます。また、塗料の体験ブースでは、臭いを吸着する「アレス シックイ」も展示してあり、吸着効果を実感していただけるようになっています。

塗装の見本も大きなサイズで見ることができます

「アレス シックイ」の無臭効果テスト
塗装してあるBOXはまったく匂いがしません

この施設は見学はもちろん、展示会や打ち合わせなどにもお使いいただけます。ぜひお気軽にお問い合わせください。ここでさまざまな塗料を知っていただき、塗装で内装をもっと楽しくしていきたいと思っています。

ALESCO 関西ペイント販売株式会社　http://www.kansai.co.jp

塗料および塗料関連製品の製造・調色・加工・販売。
本社には「PAINT GALLERY」を併設しています。

本　　社　東京都大田区南六郷3丁目12-1
TEL：03-5711-8901　FAX：03-5711-8931
アクセス：京急本線六郷土手駅より徒歩5分
「PAINT GALLERY」は予約制です。水曜定休。

CONTENTS

COLONNADE

4 **第29回 JIA神奈川建築WEEK かながわ建築祭2018**
「木」がつくる豊かなまちの風景 コンテンポラリーズ／関東学院大学 柳澤 潤

8 **横浜近代建築街歩き** 横浜の銀行建築 カサイアーキテクチュラルデザイン 笠井三義

10 **山梨地域会** 美しいまちづくり奮闘記 馬場設計 奥村一利
S PLUS ONE 坂野由美子
アルケドアティス 網野隆明
堂本建築計画工房 堂本隆司

12 **群馬地域会** 「ここにあるタカラものを探し続けて」 飯井建築設計事務所 飯井雅裕

FORUM

14 **海外レポート** 英国のBIM普及状況について 小笠原正豊建築設計事務所 小笠原正豊

16 **覗いてみました他人の流儀** 尾崎文雄氏に聞く
美術を深く知り 作品の良さを引き出す空間をつくる Bulletin編集WG

18 **温故知新** 処女作から想うこと 石田敏明建築設計事務所／神奈川大学 石田敏明
抱負を語る 「ことば」と「スケッチ」のちからに学ぶ 窪寺弘行・建築計画事務所 窪寺弘行
抱負を語る 若かりし頃の自分への反省と誓い フィールド・デザイン・アーキテクツ 井上雅宏

20 **バックヤードツアー** 日本大学理工学部船橋キャンパス Bulletin編集WG

22 **委員会活動報告** アーバントリップ実行委員会 第85回JIAアーバントリップ 関東学院大学 水沼淑子

23 **委員会活動報告** 災害対策委員会 日建設計 松下 督

23 **委員会活動報告** 都市・まちづくり委員会 三菱地所 亀井尚志

24 **委員会活動報告** 交流委員会 IAO竹田設計 河野剛陽

24 **委員会活動報告** 交流委員会Gグループ 深滝准一建築設計室 深滝准一

25 **部会活動報告** 住宅再生部会 宇佐美潔建築計画工房 宇佐美潔

25 **部会活動報告** 情報開発部会 ケー・デー・シー 天神良久

26 **地域会だより** 埼玉地域会 アライ設計 村田行庸

26 **地域会だより** 千葉地域会 榎本建築設計事務所 榎本雅夫

27 **地域会だより** 神奈川地域会 飯田善彦建築工房 飯田善彦

27 **地域会だより** 茨城地域会 河野正博建築設計事務所 河野正博

28 **日本版CABEを考える** 作品づくりだけでなく、環境・保存・災害・まちづくりに建築家の能力を使う意味
連健夫建築研究室 連 健夫

29 **活動報告** エネルギーの小屋：えねこや アトリエ六曜舎 湯浅 剛

BACKYARD

30 広報からのお知らせ JIA建築家大会2018東京 告知

31 コラム 腰痛からのプレゼント 阿久津新平

31 編集後記

2 **パートナーズアイ** 関西ペイント販売株式会社 オリジナルの機能性塗料で地球環境や健康志向に貢献する

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291㈹ Fax：03-3408-8294
http://www.jia-kanto.org/members/

報告　第29回 JIA神奈川建築WEEK　かながわ建築祭2018

テーマ

「木」がつくる豊かなまちの風景

開催日：2018年2月23日（金）～2月25日（日）
会　場：横浜市開港記念会館、みなとみらい線馬車道駅コンコースなど

第29回JIA神奈川建築WEEKは昨年に引き続き、みなとみらい線馬車道駅コンコースを中心に、かながわ建築祭2018『「木」がつくる豊かなまちの風景』というテーマで、2月23日～25日までの3日間開催しました。

初日には、神奈川県下7大学から建築系の担当の先生方を招き、各大学の授業カリキュラムや最近の卒制の傾向などをプレゼンテーションしていただき、白熱した議論が展開されました。

2日目には、建築家 内藤廣さんに基調講演、続いて建築家 福島加津也さん＋冨永祥子さん、内海彩さん、そして私がショートプレゼンテーションを行いました。内藤さんの「木」に対する考え方やこれからのあり方への提言、福島さん、冨永さん、内海さんの実験的実践も含めて、とても示唆深いシンポジウムとなりました。満席の会場の方々の表情がそれを物語っていました。

3日目には、「茶室」「デザインアワード」「卒業設計コンクール」と3つの審査を同時に行い、各コーナーとも大勢の人で賑わう結果となりました。こうしたパブリックな場所で公開で行われる審査風景に時折一般の方も足を留め、途中聞き入っている様子が散見されました。JIA神奈川地域会の目指す「地域に開かされた専門家集団」という点においても満足いただける結果だったのではないでしょうか。

3日目の夜にそれぞれの表彰式を行い、場所を変えてパーティーへ。そこでは緊張から解かれた大勢の学生が建築家と和やかに交流を図る姿が印象的でした。3日間のイベントが成功裡に終わったのも、JIA会員、横浜市、総合資格、講演、審査にご協力いただいた建築家の皆さま、各大学の先生方、学生たち、その他大勢の皆さまの協力があってこそです。ここに改めて感謝申し上げます。

本年もさまざまな宿題をいただきました、また来年度以降につなげたいと思います。

かながわ建築祭
2018
実行委員長
柳澤　潤

神奈川7大学による討論会
卒業設計の傾向と解説2018

■開催日　2月23日（金）
■会　場　みなとみらい線馬車道駅コンコース

建築祭企画、神奈川県7大学による卒業設計コンクールの前哨戦として、各大学の指導教官の皆さんに集まっていただきました。前半では、それぞれの大学教員から、建築教育・卒業設計の傾向、卒業後の進路等報告していただき、後半では各大学でのクロストークで議論を深めました。

印象に残っているのは、「どのような社会人を育てようとしているか？」という議題に対して、「建築教育」の枠を超えた「人間教育」という大きな視野で、各先生が学生と向き合っている姿でした。（安田博道）

パネリスト：上野正也（神奈川大学）
粕谷淳司（関東学院大学）
松川昌平（慶應義塾大学）
野口直人（東海大学）
八尾　廣（東京工芸大学）
門脇耕三（明治大学）
高橋一平（横浜国立大学）
司　　会：柳澤　潤（JIA神奈川）

討論会では、先生方の学生に対する深い愛情が滲み出ていました

馬車道駅を通行する一般の人たちも、自由に討論会を見ることができます

メインシンポジウム
「木」がつくる豊かなまちの風景

■開催日　2月24日（土）
■会　場　横浜市開港記念会館1号室

立ち見が出るほどの盛況ぶりを見せたのは、登壇者たちに対する期待からであろうか。基調講演に内藤廣氏、パネリストには福島加津也氏＋冨永祥子氏、内海彩氏、柳澤潤氏と、木造建築のみならず、建築界では別ベクトルに向けて発言力のある3組だった。さらに共催の横浜市から発注サイドとして横浜市建築局長もコメンテーターとして加わった。

今回のシンポジウムは、木をテーマにしながらも、少し次元をシフトして考えていけるものではなかっただろうか。各建築家による作品の紹介は「木」に対するスタンスを三人三様で示してくれた。しかし、それを達観するように内藤廣氏の言葉は鋭く刺さった。「木というものがトレンドとして扱われてしまってはいないか」「木にもっと真剣に向き合うべきではないか」「木の持つ冗長性を甘く見てはいけない」と。

この冗長性こそ、20世紀が絡み取られていたモダニズムや合理主義一辺倒の世の中に対し、カウンターとして、21世紀の新たな価値観のベースとなり得ると感じたのは筆者だけではあるまい。

（田井幹夫）

基調講演　：内藤　廣（内藤廣建築設計事務所）
パネリスト：内藤　廣（内藤廣建築設計事務所）
　　福島加津也（福島加津也＋冨永祥子建築設計事務所）
　　冨永祥子（福島加津也＋冨永祥子建築設計事務所）
　　内海　彩（内海彩建築設計事務所）
　　柳澤　潤（コンテンポラリーズ／関東学院大学）
コメンテーター：坂和伸賢（横浜市建築局）
司　　会　：小泉雅生（小泉アトリエ／首都大学東京）

内藤廣さんによる基調講演

内藤廣さんとパネリストも交えた討論会

卒業設計コンクール
作品展示・公開審査

■作品展示　2月23日（金）～25日（日）
■公開審査　2月25日（日）
■会　　場　みなとみらい線馬車道駅コンコース

神奈川県の7大学から選抜された35作品が集まり、公開審査が行われました。今年は審査委員長を野沢正光氏、審査員を長坂常氏、小堀哲夫氏、金野千恵氏にお願いしました。午前中は審査員の方々が学生の展示作品を巡回審査して上位10作品を選定。午後からは上位10作品の学生がプレゼンテーションを行い、その後さらに金銀銅の3作品を選定する討論会が行われました。また審査員特別賞4作品と総合資格賞1作品の選定も行われました。今年も力作が多く、例年同様、白熱した討論会となりました。

（小山将史）

審査委員長：野沢正光（野沢正光建築工房）
審査員　　：小堀哲夫（小堀哲夫建築設計事務所）
　　長坂　常（スキーマ建築計画）
　　金野千恵（teco）

入賞者

金　賞：久米雄志（横浜国立大学）
銀　賞：ラグワ・ハンダ（東京工芸大学）
銅　賞：池谷浩樹（横浜国立大学）
野沢賞：テイ・ヨウカ（明治大学）
長坂賞：小嶋一輝（慶應義塾大学）
小堀賞：オウ・シン（東海大学）
金野賞：木下規海（慶應義塾大学）
総合資格賞：矢吹拓也（神奈川大学）
なお、金賞と銀賞が全国大会へ進みます。

作品展示

公開審査

甲乙付けがたい優秀な作品が多く、今年も白熱した公開審査となりました

一番小さな交流のかたち「2帖の茶室」
茶室デザインコンペティションと馬車道茶会

- 作品展示　2月23日（金）～25日（日）
- 公開審査　2月25日（日）
- 会　　場　みなとみらい線馬車道駅コンコース

茶室デザインコンペティションは、「一番小さな交流のかたち」と題して2帖の茶室のデザインを公募するものです。応募案の中から優秀案を選出、かながわ建築祭の会場で公開審査し最優秀賞を決定します。毎回同一のテーマ、限られた予算にもかかわらず多彩な提案が集まります。審査員は飯田善彦氏、室伏次郎氏、堀越英嗣氏、青木恵美子氏、金箱温春氏の5人。建築家の堀越英嗣氏は裏千家、青木恵美子氏は武者小路千家の茶人でもあり、金箱温春氏は構造家です。

かながわ建築祭の準備に先んじて、2017年11月初旬に募集活動を開始しました。JIA神奈川の協力会員の協進印刷に協力していただき、募集フライヤーを作成し、JIA神奈川のホームページに募集サイトを開設、同時に新建築社をはじめとする複数のコンペ情報サイトに掲載を依頼しました。

2018年1月16日に飯田善彦氏のカフェスペースを審査会場とし、一次審査を行いました。応募総数は30案、この中から優秀3案を選出し、応募者に製作依頼をいたしました。優秀案はそれぞれ以下のような案で力作が集まりました。

かながわ建築祭の会場にて制作された茶室を実際に体感しながら、各応募者からのプレゼンテーションのあと最終審査を行い、最優秀賞はアルミ風船を磁力で連結して空間をつくる浅見案となりました。この審査と並行して武者小路千家神奈川官休会による茶会が竹を使った奥野案で開催され、多くの方々が来場し、これらのデザイン茶室で一期一会の交流が行われました。

（山口 賢）

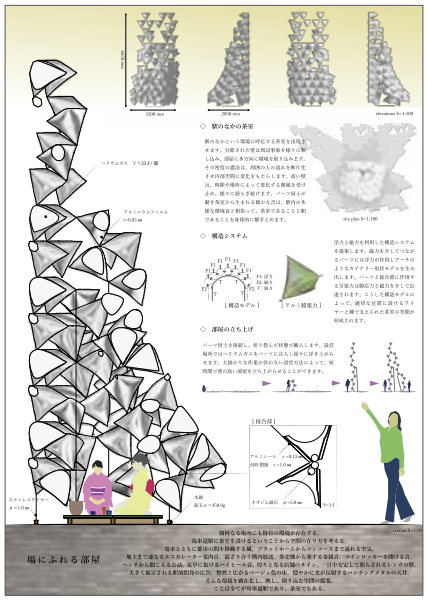
茶会には一般の人達も自由に参加できます

展示

茶会

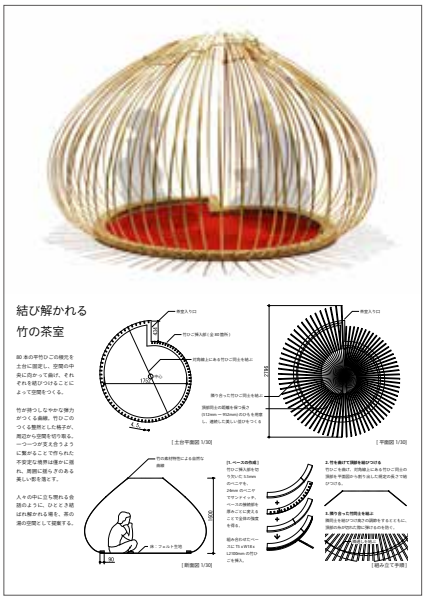
●最優秀賞　浅見泰則

アルミ風船の浮力と磁力を利用し空間を形成する案



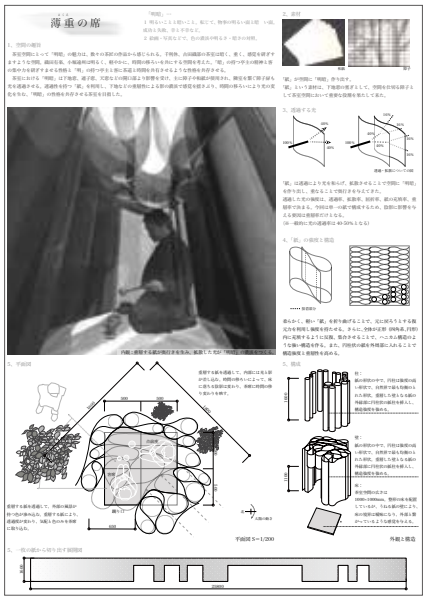
●優秀賞　奥野幹

竹を素材に日本的な風情を醸し出す美しい案



●優秀賞　玉田翔也

紙の厚みとその剛性のバランスを利用した、光の入り方が美しい案



第2回 JIA神奈川デザインアワード 作品展示・公開審査

■作品展示　2月23日（金）～25日（日）
■公開審査　2月25日（日）
■会　　場　みなとみらい線馬車道駅コンコース

今年も伊東豊雄さんを審査委員長に迎えて、第２回 JIA神奈川デザインアワードが行われた。

かながわ建築祭の「木」がつくる豊かなまちの風景というテーマに沿った案を募集したのだが、42作品の応募があり、盆栽から木の大断面加工までその幅は例年通り広く、正にお祭りらしい開催となった。この基準のはっきりしないテーマに対して審査委員長をはじめ他の審査員達も真摯に答えてくれ、無事大賞1点、優秀賞2点と特別賞が3点選定された。確実に去年よりプレゼンテーションの質も上がってきているので、このまま誰もが認知するアワードになることを望んでいる。（納谷 新）

審査委員長：伊東豊雄（伊東豊雄建築設計事務所）
審査員：　栗原健太郎（studio velocity 一級建築士事務所）
　　松岡聡（一級建築士事務所松岡聡田村裕希）
　　田村裕希（一級建築士事務所松岡聡田村裕希）
司　会：　納谷新（納谷建築設計事務所）

デザインアワード受賞者

大　賞

いりこ庵 島の再生（加茂紀和子＋曽我部昌史＋竹内昌義＋マニュエル・タルディッツ／みかん組＋明治大学IAUD）

優秀賞

Ogunit House（飯田善彦／飯田善彦建築工房）
KAZEN HOUSE（横河健／横河設計工房）

審査員特別賞

伊東賞：**豊かなまちの風景を、森業がつくる。**
（三原栄一／アトリエ エーワン）
松岡・田村賞：**街にウッドブリッジ**
（笠井三義／カサイアーキテクチュラルデザイン）
スタジオベロシティ賞：**UNICO**
（西田司＋森詩央里＋伊藤彩良＋大沢雄城＋秋吉浩気／オンデザイン＋VUILD）

審査前半では、作品応募者は各審査員に作品パネルの前で説明ができます

東海大学学生による都市木造の展示

実在の敷地を選び、都市木造によるまちづくりをテーマに計画しています

横浜近代建築展

馬車道駅の改札口付近に展示。一般の人たちも自由に見ることができます

神奈川建築コンクールの展示

神奈川建築コンクール受賞者の優秀な建築作品も展示しています

表彰式（大卒コン・茶室コンペ・アワード合同）

大卒コン、茶室コンペ、アワードの各受賞者、各審査員を囲んだ記念撮影

かながわ建築祭2018

横浜の銀行建築

開催日：2018年2月24日（土）
集　合：馬車道駅改札口

神奈川地域会
まちづくり保存研究会
笠井三義

横浜の街歩きも今回で早10回目です。2011年の「かながわ建築祭」から毎年テーマを決めて横浜の街歩きを計画し、実行してきました。毎回参加者は15名程度ですが、リピーターの人も数名おられます。毎回違った視点で、プレゼンテーション資料をパワーポイントで作成し、その報告書的な資料を見て解説しながら街を歩いてきました。

■今までの街歩き

1	2011年（建築祭）山手街歩き 洋館からブラフ積みまで　失われた洋館を探る
2	2011年（9月）みんなが元気になるまちづくり 関東学院三春台校舎＋震災復興＋戦災復興＋伊勢佐木町を巡る
3	2012年（建築祭）関内地区を歩く 横浜市役所から日本大通り・海岸通りを巡る
4	2012年（JIA全国大会）エクスカーション 震災・戦災を生き抜いた横浜街歩き　山手～関内
5	2013年（建築祭）横浜近代建築街歩き 様式建築のポイントと横浜の教会建築の特徴を探る
6	2014年（建築祭）港都 横浜を歩く 北仲通りから新港埠頭を巡り赤レンガ倉庫の歴史を探る
7	2015年（建築祭）横浜近代建築街歩き 横浜近代建築から防火帯建築まで　馬車道周りを中心として巡る
8	2016年（建築祭）船による街歩き 吉田新田・開港から関東大震災復興橋梁までを見る
9	2017年（建築祭）違った視点で街を見る 震災復興橋梁を見ながら川面レベルで街を見る （吉田新田から戦災復興建築まで）
10	2018年（建築祭）横浜の銀行建築 現存・復元・現存しないも含め29棟の銀行建築を巡る

受付・イヤホン渡し・資料渡し等をしながらルートを説明。
多少緊張しながらも、説明を始めてしまえばそのあとはスムーズに流れていく。

■なぜ２月末の街歩きか？

2018年の街歩きのチラシ

かながわ建築祭は長い歴史があるが、私が知っているのはこの一番寒い時期に行うものである。建築祭のイベントのひとつに、神奈川県下の各大学の卒業設計の力作を各大学から3～5作出品していただき、その中から審査員の方の審査・講評・賞の授与を行うものがある。そのためにどうしても卒業設計提出後のスケジュールを優先すると、建築祭の開催は2月下旬になる。

その時期に合わせるため、厳しい寒さの中での街歩きとなることもある。過去2回ほど寒い小雨の中、街歩きを強行したが、皆さん文句ひとつ言わず、最後までお付き合いいただいた。強者揃い、無類の建築好きである。

ここ3年は、天気も上々で暖かい日に恵まれた。雨男と呼ばれた時期もあったが、汚名返上となった今年の街歩きであった。

■今年の進歩した点

毎回15名程度の街歩きのため、ハンドホンを使って説明している。ただし外部で15名ぐらいになると、よほど注意して集まっていただかないと声が通らないことになる。

説明者が前を向いて説明していると、後ろの人が聞こえないという事態が発生し、知らないうちに説明している本人が一人熱く語っているということになる。そこで今年は新兵器の登場である。ヘッドセット型のイヤホンを各参加者に付けていただき、説明者はピンマイクで説明した。

当日の資料：本町・馬車道周りの銀行建築（戦前・震災前の銀行含む）

当日の資料：山下町周りの銀行建築　やはり居留地側は外資系銀行のみ

これは、大きな声を出さず、外部でも1対1の応答ができ、また建物から建物の移動時間も有効に説明ができる。下の写真にあるように、参加者の方も熱心にメモ帳片手に質問をしたり、参加費がイヤホン分多少高くなったが、2時間半皆さん満足されたようである。

■2018年建築祭　街歩き

今回のテーマは「横浜の銀行建築」とした。現存する関内地区の銀行建築は（一部関外だが）、現存・復元を含め9棟ある。今回は、現存していない建物・碑を含め19ヵ所を巡った。震災前の写真・図面等の資料をもとに街歩きしながら解説をした。

横浜正金銀行は、妻木頼黄の設計であり国の重要文化財となっている。第一世代の建築家であり当建物は当時留学先の建築様式の引き写しであった。

その後、ヨーロッパの主流のギリシャリバイバルスタイルが銀行建築の顔となった。明治30年ごろは、アメリカは南北戦争がようやく終わったころ、ロシアは日露戦争で手痛い敗北、ドイツも中世的国家支配からやっと抜け出したころ、フランスは退廃的な風潮の中で印象派の画家たちが活躍した。その中にあってイギリスだけは7つの海を支配。世界の金融界の流れも、ロンドンを中心に回っていた。そのイギリス・ロンドンにあってBANK OF ENGLANDの建設に当たり決定されたのが、ギリシャ風神殿造りであった。

正金銀行前　銀行建築は、なぜギリシャ神殿風が多いのか？

銀行の歴史をひも解いて見ると、ギリシャの神官が農民や商工業者に金を貸し、金利を取っていたことが分かり、これが歴史に登場した金融業者の始まりだった。この神官が活躍した神殿こそ銀行建築にふさわしいということにより、英国銀行本店は外面にも内面にもコリント式柱で飾られた建物になった。それ以降、世界の銀行は、ギリシャ風神殿造りが一世を風靡するようになった。

2時間半の間、このような説明を挟みながら街歩きを行い、各建物間の移動の折りにも説明しながら廻った。

■約8年10回の街歩きを通して

街歩きを通していろいろな勉強をさせてもらいました。やはり人に説明するということは、かなり自分でも楽しんでやらないと続きません。義務で行っているとつい既成の資料だけの説明になり、喜んでいただけないという実感を持ちました。自分自身が、なぜという疑問を持ち、調べることにより、小さいことでも実感として人に説明できることが喜びであり、聞いている方にも感動していただけると思います。

ここ10年近く街歩きを行い、このあたりで違う視点を持った方にバトンタッチする時がきたようです。ぜひ来年の建築祭の街歩きは、新たな方がコーディネートしていただけるようにお願いします。

美しいまちづくり奮闘記
―山梨地域会の提案プロジェクト―

奥村一利
山梨地域会
代表

坂野由美子
ワインの聖地
担当

網野隆明
お城フロント
担当

堂本隆司
桃太郎伝説
担当

山梨地域会は、美しい自然景観や地域の産業が作り出してきた特徴的な景観に価値を置き、歴史のなかで守られてきた風習や古民家を生かし、行政・住民・企業との協働により、地域住民が誇りを持てる美しい「まちづくり」を目指しています。平成29年度に山梨地域会が作成・提案したプロジェクトを紹介します。

①ワインの聖地プロジェクト（甲州市）

山梨県甲州市は、ブドウ棚の連なる美しい景観、ワイン文化などの資源を構成資産とする世界農業遺産の認定を目指しています。

これに対し、山梨地域会ではブドウやワインだけではなく、美しいブドウ畑の景観や地域の素材にこだわった食事、古民家風で歴史観のあるワイナリー、地域の歴史と魅力ある素材を含めたトータルなワイン文化とサービスを提供したまちづくりを考えています。観光客が日本最大のワイナリー集積地を巡りながら、地域の歴史産地を形成している人たちとのコミュニケーションを通してワインができる過程を学び、滞在し、地域の自然景観を観賞し、ワイン作りのうんちくを聞き、自分が見つけたお気に入りのワインや地域ならではの食を楽しむ、そういった「ワインリゾート」を市に提案しています。

この提案は甲州市との協議では賛同を得ました。また、今後行政が行う、市指定の文化財に登録するための古民家調査の協力要請を受けました。ワイン会社との協議では、カリフォルニア州のナパバレーのようなワインリゾートを目指すべきとの提言をいただきました。

「宮光園」は、ワイン産業の先覚者、宮崎光太郎が創業した宮崎葡萄酒醸造所と観光葡萄園の総称。日本初のワイン醸造会社である大日本山梨葡萄酒会社が明治19年に解散した後、醸造器具等一切を引き継いで創業した。当時のワイン醸造や、皇族の行啓、行幸の様子がわかる貴重な資料を展示している。
山梨地域会の網野隆明氏が保存設計監理を担当。

ブドウ棚の連なる美しい景観

山梨地域会の提案「ワイン文化のオーベルジュ」

甲州市勝沼町にある「宮光園（みやこうえん）」を中心とした約1km四方のエリアには、ブドウ畑と11社のワイナリーが集積している。ブドウ棚の連なる風景や、南側には京戸山（きょうどやま）扇状地があり、春には扇形にピンクの絨毯を敷き詰めたように桃の花が咲き誇る様など、果樹農業が育む美しい農業景観は大きな観光資源である。

山梨地域会は、このエリアがワインを核に多くの来訪者がゆっくりと地域の魅力を体感できる、周遊・滞在型のエリアとなることを目指し、ブドウ畑、ワイナリー、民家をリノベーションした宿泊施設、マルシェ、温泉、文化施設で構成した、ぶどうとワインの文化を学び、楽しめる「ワイン文化のオーベルジュ」とすることを提案している。

※オーベルジュ：宿泊できるレストラン

具体的な提案1：ブドウ棚付の空き家を宿泊棟に

ブドウ棚に囲まれた民家は、勝沼発祥の独自の文化であり、県外のお客様が感動するポイントでもある。リノベーションすることで地域の景観を保存することになる。

具体的な提案2：マルシェ店舗棟

計画エリアの北側を東西に流れている日川は、河岸段丘を形成しており、河川の両側はブドウ畑で埋めつくされていて美しい景観を形成している。この河川に沿った平坦部に木造のマルシェをつくり、ワイン販売を中心に、地元の果実や野菜、地域の物産が随時並び、地域の人々と観光客が交流できるようにする。併せてレセプション会場や、オーベルジュを提案している。

②お城フロント（甲府市）

甲府市では、甲府城周辺地域活性化計画を進めています。この計画地約47haのうち、お城の南側約12,000㎡の部分を「お城フロント」と呼び、地域会で提案しました。

このエリアは、実施計画では〈歴史・文化ゾーン〉と〈飲食・物販ゾーン〉として設定されています。〈歴史・文化ゾーン〉は、甲府市の歴史・文化を再発掘し、甲府城を中心として城下に栄えた小江戸甲府の賑わいが感じられ、街並みや交流等により歴史・文化を今に伝える施設整備を行い、来訪者に江戸時代を基調とした歴史・文化の雰囲気に触れながら、ゆっくり時間を過ごせる場を提供します。〈飲食・物販ゾーン〉は、民間施設を導入できるよう基盤整備を行い、小江戸風街並みを再現するなかで、新たな交流や歴史・文化の創造を目指すことを目標にしています。

〈計画の経過〉

平成20年	11月	甲府市中心市街地活性化基本計画　策定
平成24年	3月	甲府駅南口周辺地域修景計画（新世紀甲府城下町研究会より、お城フロントまち並整備プロジェクトの紹介）
平成27年	10月	甲府商工会議所より、お城フロント（エリア面積20,300㎡）の提言を知事、甲府市長に提出。
平成28年	6月	甲府城周辺地域活性化基本計画　策定
平成29年	12月	甲府城周辺地域活性化実施計画　策定

山梨地域会の提案

山梨地域会では、実施計画に先立ち平成29年3月に建築展を開き、模型やパースを使って小江戸風の街並みを提案した。模型写真手前堀側に、山梨の物産を販売する店舗および甲府城の歴史を伝える資料館を提案し、奥の通りには若い起業家のための店舗を並べ街並みをつくり出した。現在、県・市の実施計画も同じ考え方で進んでいる。

③レイクフロント山中（山中湖村）

山中湖の北東に位置する平野地区は、夏休みは学生のスポーツ合宿で賑わいました。しかし、近年は個人客が増え、団体での利用は減少しており、利用客の変化に対応できなくなっています。

「結の広場」（筆者設計）公民館機能・異大学の学生が交流利用する。基本計画：EAU

山梨地域会の提案

山梨地域会の提案は、古民家をリノベーションした「結（ゆい）の広場」から、富士山のビューポイントの湖畔までの街並み整備と活用方法の提案、ジャズフェスティバル会場として有名な、山中交流プラザ「きらら」の駐車場を利用し、経路として船やサイクリングロードを利用し、平野地区の街並み保全と活性化を計画する提案をしている。

④桃太郎伝説と健康長寿（上野原市）

山梨県東部の大月市、上野原市には桃太郎伝説にまつわる地名や史跡、昔話などが残っています。百蔵山（桃倉山）、九鬼山、犬目、鳥沢、猿橋など、物語に登場する場所がすべてあります。また、上野原市の栂原（ゆずりはら）地域はかつて長寿村として名を馳せていました。

山梨地域会の提案

山梨地域会では、桃太郎が歩いたであろう上野原駅前を流れる桂川沿いをウォーキング、鬼が住んでいたとされる九鬼山をトレッキングなどの運動と、雑穀を取り入れた長寿食を合わせて健康長寿の町づくりを提案している。

このように、今年度は多くのプロジェクトを作成し提案しました。よくここまでやったものだと思います。提案作りは自分たちのペースで進めてきましたが、これから進めるためには、多くの難題が待ち構えています。古民家活用に向けて所有者との調整、運営事業者の募集とマッチングなど課題があります。これら課題を解決するには、マッチング可能な仕組み作りが必須だと考え、来年度にはこの仕組み作りを重点的に行います。いずれにせよ何十年と関わることを覚悟しています。（奥村一利）

「ここにあるタカラものを探し続けて」

—群馬地域会２年間の取り組み—

群馬地域会
代表幹事
飯井雅裕

2016年6月に開催された第1回JIA関東甲信越支部大会のテーマである「ここにあるタカラもの」を、引き続き我々群馬地域会の活動テーマとし、2016、2017年は研究を深める2年間としました。具体的には群馬各地域独自の文化・生活・歴史などを視察したり、勉強会を開いたり、建築や街について考えていく活動をしました。まず「タカラサガシ」と称して春と秋に県内各地域に出かけ、その地域の持つ固有の文化や歴史、風土を見つめ直す見学会を行いました。それを踏まえた上で、11月に少林山で「建築学校」を開催し、我々メンバーの研鑽の場を設けるとともに、見学会に参加したメンバーによる視察報告会を行いました。その内容を「タカラ巡りMAP」としてまとめ、地域会冊子に掲載し、3月に行われた「まちなか建築展」で無料配布いたしました。「まちなか建築展」では各メンバーによる展示とともに、活動テーマにふさわしいセミナーや、メンバーが発表するギャラリートークを行い、1年間の活動の総まとめをしました。

以下、順を追って詳しく報告します。

1. 見学会「タカラサガシ」

2016年9月に1泊2日で開催された第1回「北毛タカラサガシ」では、渋川、中之条、長野原にある国登録・指定重要文化財を見学しました。宿泊は、「千と千尋の神隠し」のモデルと言われる四万温泉積善館。湯治気分を味わい、温泉建築を堪能しながらの意見交換も大変有意義でありました。2日目に訪れた六合赤岩地区は、県内初の重要伝統的建築物群保存地区です。ちょうど「ふれあい感謝祭」が行われていて、農産物が振る舞われていました。建物やまち並みだけではなく、地区の人々の心のもてなしにも触れることができました。

2017年7月の第2回「東毛タカラサガシ」では、太田、館林の2つの街を1泊2日で見学しました。太田では新しくオープンした太田市美術館・図書館と国指定重要文化財の旧中島知久平邸を視察。館林では駅前から「歴史の小径」を歩き、日清製粉旧事務所のある製粉ミュージアムを見学しました。東毛では地域を支えた産業家によって文化的価値のある建築が生み出され、保存継承されていることを見ることができました。

2017年9月の第3回「西毛タカラサガシ」は、世界遺産の富岡製糸場や建築中の富岡新市庁舎など、新旧の建物整備が進む富岡の街を歩きました。駅前にある富岡倉庫は、駅から街から街中へつながる新たな拠点として整備、利活用を進めています。富岡新庁舎は、歴史的な街路の構成を施設にも活かし、分棟形式で回遊性の高い平面計画がなされていました。富岡製糸場周辺は、景観形成を大切にした取り組みが進められています。

見学会「西毛タカラサガシ」の様子

2.「建築学校」

2017年11月に開催された「建築学校」では、ブルーノ・タウトが過ごした少林山達磨寺の大講堂を学舎として、建築について学び、語りあいました。メンバーにとっては研鑽の場でもあります。タウトが日本の地で理解を深めた「禅」と「茶」を体感する時間も設けました。「学校」と銘打ったその1時限目が「禅」の時間で、メンバーは靴下を脱ぎ、坐蒲（ざぶ）に腰を下ろして姿勢を正し、住職の広瀬氏から指導と講話を受けました。2時限目は見学会「タカラサガシ」の報告会とセミナーを開いて、より深く学ぶ場としました。昨年のセミナーは村田敬一先生をお招きして「群馬県における温泉旅館建築の変遷」を学びま

建築学校「禅」の会場

洗心亭での「お茶会」

した。最後の時限はタウトが過ごした「洗心亭」でお茶会を開催しました。茶の専門家による作法の指導を受けるとともに、タウトが見たであろう真っ赤な紅葉をガラス越しに眺めながら、日本文化と建築の関係に思いを馳せ、その雰囲気を堪能しました。

3. 地域会冊子『GA』の発刊と「タカラ巡りMAP」の作成

今までA4サイズだった地域会冊子を、手に取りやすいA5サイズに改め、名称も『GA』(Gunma Architect)として今年の2月に発刊しました。春と秋の見学会で視察したものを「タカラ巡りMAP」としてまとめ、写真と共に掲載しました。またもうひとつの特集である「建築家のしごと」では、メンバーの作品を写真と文章で各自紹介し、気軽に読んでもらえるものとしました。

地域会冊子『GA』

「タカラ巡りMAP」

4.「まちなか建築展」

3月には恒例の「まちなか建築展」を開催しました。群馬交響楽団と群馬音楽センターで有名な「音楽のある街高崎」。「caféあすなろ」はこの文化運動を展開する舞台となった伝説のクラシック喫茶「あすなろ」を復活させたもので、現在高崎経済大学の学生が運営しています。1階喫茶室の壁面は普段は絵画やアート作品が展示されていますが、ここに地域会メンバーの作品写真を展示しました。また2階ホールにも模型とパネルを展示し、週末にはセミナーを開催しました。

セミナーでは我々の活動テーマにふさわしい題材を選び、講師の先生のお話を聞きます。昨年はJIA再生部会の柳沢伸也部会長と大橋智子副部会長をお招きして「今あるよい建物をこれからも使い続けていくために」をテーマにお話をしていただきました。今年は富岡市まちなか拠点整備室の森田昭芳室長をお招きし「まちづくりとタカラモノ」をテーマに富岡の今までの運動の歩みと、現在とこれからの動きについて解説していただきました。こうしてセミナーは2年間しっかりと繋がっている内容となりました。

さらに今年は「まちなか建築展」の中で「高崎中心街まち歩き」も開催しました。高崎は一千年以上前は水が無い不毛の地でしたが、長野堰用水を引くことで街が発展しました。中山道など道の整備とともに街の骨格を造ったこの「長野堰用水」に着目し、歴史と街づくりを研究する「長野堰を語りつぐ会」の皆様と一緒にまち歩きをしました。写真のジオラマ模型は、この会が江戸時代の街と用水の関係を理解するために作成したものです。この時造られた街の骨格が現在もそのまま残っており、この模型写真を辿りながらの行程を組みました。

江戸時代に張り巡らされていた用水路は今では暗渠になってしまいましたが、唯一残った高崎城址のお堀に今なお水を運ぶ長野堰用水は、街の「タカラもの」であることは間違いありません。もっともっと人の目に触れるような活用がされて良いのではないかと思いました。

まち歩き「高崎中心街タカラサガシ」案内と集合写真

「ここにあるタカラもの」をテーマに活動した2年間を通して感じたことは、建築や街を考える際には「タカラ」が何であるかを考えることでいろいろなことが整理され、どう行動したら良いかが明確になっていくということです。「タカラ」は「もの」だけでなく、視覚的に表せない文化や考え方、思いなども含まれています。普段の設計業務でも、クライアントの「タカラもの」が何であるかを考えることで発想が豊かになるのです。

この2年間のJIAの活動は非常に有意義でありました。そしてそこにある「大きなタカラ」は「人」であったと心から感じています。

caféあすなろでの「まちなか建築展」の準備に集まる地域会メンバー

英国のBIM普及状況について

NBS（National Building Specification）訪問

小笠原正豊

BIMは世界的に見てどの程度普及しているのでしょうか。特殊なパイロットプロジェクトや、プロジェクトを通じてうまく活用できた一部分のみを取り上げて、「BIMの活用ができた」としている場合が多いように思えるのですが、実際どの程度、建設産業に普及しているかよく分かりません。

現在、安藤正雄千葉大名誉教授や志手一哉芝浦工業大学准教授らとともに、米国と英国を対象として「BIMがどの程度浸透しているのか」について、発注者・設計者・施工者や各種団体に対する調査を進めています。この「海外レポート」では、2017年秋に英国ニューカッスルにあるNBS本部を訪問した時のことについて書きたいと思います。

■NBS（National Building Specification）とは

NBSは設計・施工時に用いられる「仕様書」の記述方法を制定するRoyal Institue of British Architects（RIBA 王立英国建築家協会）の外郭団体です。1973年に設立され、現在では5,000以上の事務所でNBS制定による「仕様書」の記述方法が使われています。2012年にはBIMライブラリを立ち上げその普及に努めています。

建築の設計図書は、大きく分けると「設計図」と「仕様書」から成り立っています。「設計図」および「仕様書」は建物ごとに異なりますが、「仕様」の内容をどのように分類し、どのように記載するかについて「標準化」された共通認識がないと、新しくプロジェクトチームを組む設計者間および設計者施工者間での情報共有がスムーズにいきません。

BIMは単なる3次元モデルとして認識されがちですが、その本質はさまざまな属性データを含んだ建築物のデータベースであり、その情報を計画・設計・施工・運用でつないで、利活用していくことが重要と考えられています。BIMを推し進めるためにはこのようなデータベース構築がカギとなりますが、その記述方法について共通理解がないと、データベースが適切に構築できず、結果うまく情報共有できないことにつながります。「標準化」を進め、その記述方法を制定するNBSは、BIM浸透にとって大変重要な役割を果たしているといえるでしょう。

フルリノベーションされたNBSの建物

天井の高い1階オフィス

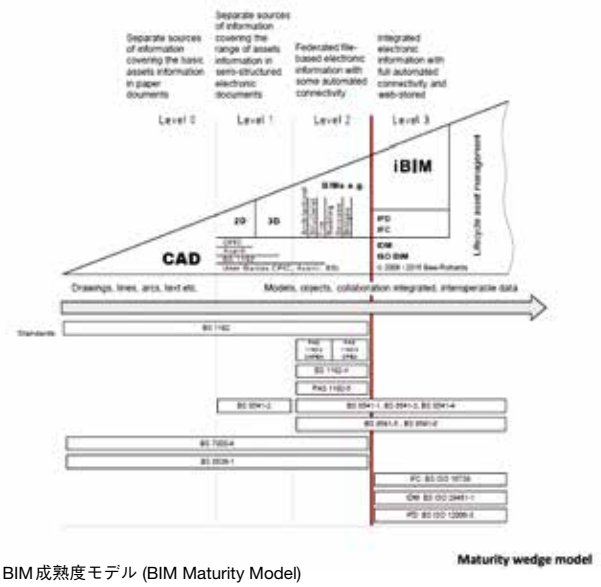
NBSの行った調査によると、英国ではBIMは着々と浸透しているようです。BIMを採用している人の割合は、2011年には13%であったものの、2017年には62%にまで上昇しています。一方でBIMを採用していないかその必要性を感じていない人の割合は、2011年には43%であったものの2017年には3%まで減少しています。これらから、BIM化への移行が順調に進み、この6年間で設計手法が大きく変化していることが分かります。

■BIM Mandate

「手書き」から「CAD」に移行した時、設計手法において大きなパラダイムシフトがありました。「CAD」から「BIM」に移行しつつある現在、設計組織によっては「CAD・BIM併用」として緩やかに変わる場合もあれば、新しいプロジェクトを境に「CAD」から「BIM」へと大きくシフトする場合もあるでしょう。これらの流れを「BIM成熟度モデル」は概念的に示しています。

英政府は、2016年4月4日までに、公共調達プロジェクトをBIMによって行うことを宣言しました。これはUK Government's BIM Level 2 Mandate（BIM Level 2によって公共調達を行う英政府の命令）と呼ばれています。

日本では、組織事務所やゼネコン設計部の先進的な試みもありますが、日本全国のアトリエ設計事務所や中小工務店も含めると、大部分の建築プロジェクトはいまだLevel 1（またはLevel 0）といったところではないでしょうか。NBSの調査によると、現段階で70%はすでにLevel 2に到達しているようです。Level 1にとどまっているのは27%であり、Level 3に到達しているのは7%という結果が出ています。Level 3までにはまだまだ時間がかかりそう



BIM成熟度モデル (BIM Maturity Model)
British Standards Institute (BSI)　の関連ウェブサイトより
http://bim-level2.org/en/guidance/

Level 0：2次元のCADによってのみ設計図書を作成する
Level 1：2次元と3次元の組合せによって設計図書を作成する
Level 2：BIMモデルを、意匠・構造・設備などで部分的に共有する
Level 3：共通のBIMモデルを関係者間全員で運用する

ですが、日本よりもはるかに浸透しているといえそうです。

英政府の方針は、まずは公共調達プロジェクトによって英国内にBIMを浸透させ、徐々に民間プロジェクトでもBIM採用を促すというものです。実際に施工や運用に活用するため、デベロッパーなどの発注者もBIMによる設計情報の作成を義務付けていると、英国の発注者・設計者からもヒアリングすることができました。

■組織設計事務所とアトリエ系事務所

設計環境は組織設計事務所とアトリエ系事務所で大きく異なると考えられます。組織設計事務所は資金やノウハウもあり、大規模プロジェクトを設計しているため、BIMを採用するメリットも大きいかもしれません。一方、アトリエ系事務所ではなかなかBIMに手を出しづらいのが日本の現状なのではないでしょうか。

調査によると、英国では、小規模事務所（15人以下の組織）では、48％の事務所がBIMを採用しているのに対し、中規模事務所（16人～50人の組織）および大規模事務所（50人以上の組織）では74％の事務所がBIMを採用しています。日本では、小規模事務所であるアトリエ系事務所もここまではBIMを採用していないのではないでしょうか。

■オープンなプラットフォーム

NBSのように「仕様書」の記述方法を制定する団体が存在し、絶えずその枠組みを更新していることが、BIMの浸透に大きな役割を果たしています。ちなみに米国にはConstruction Specifications Institute (CSI)と呼ばれる団体が存在し、NBSと同様の役割を果たしています。NBSとCSIはそれぞれ独自の記述方法を持っていますが、お互いにすり合わせをする試みもなされているようです。

日本のプロジェクトでは、官庁営繕の公共工事標準仕様書が「標準仕様書」として使われています。しかしこの標準仕様書において用いられている分類・記述方法は「標準化」されているわけではなく、必ずしも日本国内のすべてのプロジェクトで同じ分類・記述方法が使われているわけではありません。例えば設計者が特記仕様書を作成する場合、見出し番号や分類方法も、設計事務所やプロジェクトチームによってまちまちです。これでは、設計・施工・運用をつなぐデータベースにはなりえません。

「標準化」の概念は、日本ではあまり馴染みがないかもしれません。米国の事例となりますが「標準化」の分かりやすい事例として、US National Cad Standard による各レイヤーの命名ルールがあります。例えばArchitecture（建築）のWall（壁）のFull（フルハイト）を表現する場合、A-Wall-Fullというレイヤー名とするように規定されています。こうした「標準化」されたルールに従って各設計者が図面を作成することによって、意匠・構造・設備の設計者のみならず施工者・発注者・運用者を含めて情報共有を円滑にすることが可能となります。

NBSでのミーティング

NBSにおけるミーティングでも、「日本は技術が進んでいると思われるのに、なぜBIMが普及しないのか？」「なぜ日本には、『仕様書』作成のための共通の分類方法がないのか？」といった疑問を投げかけられました。「標準化」に基づくオープンな環境で建設産業を振興していく方が良いというNBSの人たちにとって、日本のように各組織ごとに閉鎖的に開発や設計を行う状況がよく理解できないようでした。このような彼らの疑問は、BIMの必要性を感じていない日本国内マーケットのみを対象とした建築関係者にはあまり響かないかもしれません。

今後、日本の発注者・設計者・施工者の間で本当にBIMが浸透するのか、日本にBIMを浸透させるにはどのようにすればよいのか、日本独自のBIM活用手法があるのか等、さらなる調査をしていきたいと思います。

小笠原 正豊（おがさわら まさとよ）

小笠原正豊建築設計事務所 代表
東京電機大学未来科学部建築学科 常勤講師
ニューヨーク州登録建築家、AIA（米国建築家協会会員）

尾崎文雄氏に聞く

美術を深く知り 作品の良さを引き出す空間をつくる

今回は、美術館や博物館の空間設計や展示デザインに携わっておられる尾崎文雄さんにお話をうかがいました。設計事務所に勤務したのち、現在は建築設計ではなく、学芸員が希望する空間の実現や、美術作品を美しく展示することを大切に数多くの美術空間を手がけておられます。インタビュー会場には、尾崎さんが昔からお付き合いのある美術商「瀬津雅陶堂」をお借りしました。

――どのようなお仕事をされているのでしょうか。

自分の職を表わすうまい表現がないのですが、美術館や博物館のよろず相談のような仕事をしています。美術館をつくる時、学芸員の人たちは思い描くイメージがあっても、それを図面にしたりうまく表現できない場合があります。そういう時に、僕がレイアウトや展示ケースの配置などを簡単な図面にして、設計者に見せて相談します。あるいは、「これを展示したいけれどどうしたらいいだろう」という相談に対し、展示案を絵に描いて提案することもあります。また、美術館を設計する際には独特の肝腎要な部分があるので、設計者をサポートすることもあります。学芸員や設計者の言葉を翻訳し伝える仕事ですね。仕事の依頼は、学芸員や美術商からが圧倒的に多いです。

――現在のお仕事を始めたきっかけを教えてください。

大学卒業後は組織設計事務所に勤め、集合住宅や病院、都市開発などの仕事をたくさんしていました。当時は地図に残るようなものから、原寸のものまで関わりたいと思っていました。けれど大きな組織的な事務所では、ある程度経験を積むと設計チームをまとめてマネジメントする業務にシフトしていき、自分で手を動かす時間が少なくなってしまいます。それがどうなのかなとずっと感じていました。そんな環境から抜け出したかったのだと思います。

1995年に会社を辞めて、「MIHO MUSEUM」（滋賀県甲賀市）の日本側の設計チームである紀萌館に参加しました。デザインはアメリカ人建築家のI.M.ペイで、彼の仕事の仕方や、美術に詳しく現代美術家とも親しい姿を間近で見ることができました。そういう人と接する機会があって、「やはり建築にしても何にしても、もっと深く取り組まないといけないんだな」と思いました。

そして、今回インタビュー会場として使わせていただいた瀬津雅陶堂で、美術品の見方や展示の仕方を勉強させてもらうようになりました。

――瀬津雅陶堂で美術について学ばれたのですね。

瀬津雅陶堂とは20年以上の付き合いになります。当初お世話になったのが先代のご夫婦で、とくに奥様には大変お世話になりました。ここで教わりながら、店の展示を手伝うようにもなりました。先代が亡くなられて、当代に引き継がれる時に、4階のギャラリーを改造したいという話がありました。デザインは杉本博司氏で写真家であり美術家でもあり、今や建築も手がけられる方で、僕は設備の納まりや照明の位置や器具の選択などを手伝いました。完成したギャラリーでは一年に一度秋に展覧会をやるのですが、その展示デザインも手がけるようになり、今年で10回目になります。

そのようなことを続けているうちに美術業界で繋がりができ、仕事を依頼してくれる人が増えて今に至ります。

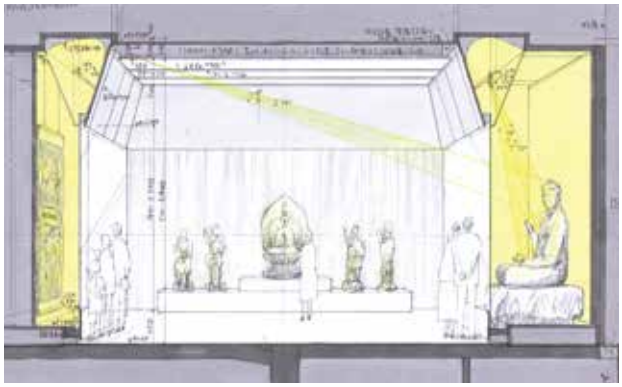
――美術や古美術に以前から興味があったのでしょうか。

子供の頃から絵は好きでよく描いていました。それから、父親がミュージアムグッズのようなものを自作の台に並べていたのを見ていたことも影響しているかもしれません。設計事務所時代には古美術系の本をたまに買って見ていました。だぶん日本の古い物が好きだったのだと思います。それでなおさら今の世界にのめり込んでしまったのでしょう。

――最近携わったプロジェクトについて教えていただけますか。

昨年11月に竣工した伊豆下田の「上原美術館」は、建設会社の設計施工の建物ですが、学芸員の人に頼まれてプランニングから詳細な部分までの提案をさせていただきました。仏教美術の施設と近代絵画の施設が併設された美術館で、仏教美術館に展示室機能と収蔵庫を増築する計画でした。仏教美術に特化したものだったので、学芸員や設計者、施工者と奈良や京都の美術館やお寺を回り、同じものを一緒に見ることから始めたプロジェクトでした。

それから、昨年は上野の森美術館で開催された書家の石川九楊氏の展覧会の展示デザインも担当しました。展示する作品のリストをいただき、それをどう展示するかを話しながら考えていきました。その時に、こういうレイアウトでこういう展示にしましょうと提案するのが僕


上原美術館の展示室断面スケッチ

完成した上原美術館の展示室

の仕事です。スケッチを描いて、造作を発注して、現場の管理をして、最後はライティングの調整などもしました。

――美術館をつくる時に大切にしていることはなんでしょうか。

美術館づくりは、まずそこが所蔵しているコレクションありきです。コレクションがないという美術館はまずありません。例えば日本の古美術であるとか、西洋美術というように美術作品の大きなジャンルが決まっている。また、もともとのコレクターの好みがあります。そのコレクションのよいところを引き出す、特徴を表わすことが大切です。

――好きな美術館や美術空間を教えていただけますか。

以前はここがいいなと思ったりしたのですが、この頃どこに行ってもいいなと思います。展示室の設えや照明などはあまり関係なくなってしまいました。というのも、とことんまで突き詰めてつくられた展示室では、展示に対する制限が出てきてしまいます。光の関係から作品はここに置かなくてはいけないとか、それって堅苦しいですよね。もっと自由に展示できていいと思います。昔のコレクターは、美術作品を自宅に飾って見ていました。美術館のような設備がなくても作品は美しい。特に日本の古美術はそう感じます。だとすると、極端に言うと建築の空間のありようよりも、それをいかに愛でて、どういうところに置いて、どうやって見るかを表現することの方が大切だと思います。

――これからの美術館に必要なことはなんでしょうか。

それは今の話と密接に関係していて、とくに建築を設計する人に考えてもらいたいのですが、美術館や博物館はただの箱ではだめだと思うのです。適当な大きさの展示室が空間としてできていればいいというのは違うと思います。

展示室や展示デザインをする時にいろいろな形をつくる人がいますが、もっと控えめに、デザインの痕跡がなくなる方がいいでしょう。その方が作品を見るのに集中できます。控えめというのは設備機器もそうだし、一番要の照明も極端に言えばいらないくらいで、できるだけ自然の光をゆるやかに使えるような部屋が良いのではと思っています。人工光で自然のような光をつくろうとしてもなかなかできません。ですから部屋の構造が大切なんです。

――尾崎さんにとって美術とは。

自分自身のようなところがあります。たとえば日本人であれば、「これは日本の書、これは中国の書かな」と自然に感じます。誰に教わったのでもないですが、それが自分自身のアイデンティティーですよね。それにすごく結び付いているのが美術だと思います。日本の古美術は茶道などの総合的な芸術の一部を成していている道具のひとつです。その中にいろいろな想いが込められて作られています。それが好きだということは、自分は日本の美術が本当に好きなんだなと思います。

――建築家にリクエストしたいことはありますか。

もし美術館や博物館を設計する機会があったら、ぜひいろいろな作品をとことんまで見てください。やはり美術館や博物館は作品がなければ成り立ちませんから。見て感じて、作品のよいところを引き出す空間づくりを心がけていただけると嬉しいです。

――貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

インタビュー：2018年2月15日　瀬津雅陶堂
聞き手：中山 薫・有泉絵美（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

尾崎 文雄

Studio REGALO代表

1957年、横浜市出身
1981年、早稲田大学理工学部建築学科卒業後、日本設計にて設計および都市再開発業務に携わる。
1995年、紀萌館設計室に入社し、MIHO MUSEUM北館展示室の設計を担当。1999年、Studio REGALOを設立。作品展示を中心とするコンサルティング、展覧会デザインや作品展示のライティングなどを手がける。五百羅漢展（江戸東京博物館）、春日大社国宝殿、上原美術館仏教館など。

FORUM

処女作から想うこと

石田敏明

私はそれまで8年間勤務していた伊東豊雄さんの事務所独立後、1982年に自身の事務所を設立し、東京で設計活動を始めました。ですから、独立して今年で36年目になります。勤務していた時に個人で両親や知人の住宅を設計していますが、独立後の第一作を処女作と呼ぶとすれば、親戚筋に当たる個人住宅(「浦崎の家」1984年12月竣工)の建て替えになります。計画時の1984年SD Reviewに入選し、竣工後いくつかの建築専門誌に掲載された、私にとってはとても思い出深い住宅です。

瀬戸内海に面する尾道のミカン畑のある山を背にした谷筋にあり、道路を隔てた谷地には水鳥も飛来する調整池があります。ここは遠望すれば、わずかに海面も見ることができる立地です。当時、計画地周辺にはまばらに瓦屋根の伝統的な様式の住宅が建ち並んでおり、草刈りや調整池の水替・清掃など地域のコミュニティもしっかりと根付いていました。

当初、老夫婦とその孫世帯の二世帯住宅として計画しましたが、その後、一世帯4人家族の住まいとなりました。ところが2年ほど前、彼の地を訪問すると空き家になっており、大変驚きました。その後、住人に市街地に引っ越した理由を聞いたところ、以下のような回答が返ってました。

第一の理由は周辺では十数年前から徐々に空き屋が増え、次第に限界集落に近い状況となりコミュニティも成立しなくなったため、やむなく車で10分ほどの市街地へ引っ越したとのことでした。今や大きな社会問題となっている少子高齢化の現状に直面した瞬間でした。未だ、解体されてはいませんが、危うい状況に変わりはありません。日本の住宅は約30年で更新されるとの統計がありますが、こういう状況を見るとますます加速するのではないかと思います。

ただ、光明もあります。近年、近くの造船業を営む会社がリゾート地開発に乗り出し、もともとヨットハーバーもあったことから、地中海に匹敵するリゾートエリアにしようと着々と整備が進んでいるようです。そのエリアには著名な建築家たちが設計したリゾート施設やその関連施設があり、徐々に脚光を浴びつつあります。また、全国的にはAirbnb(エアー・ビー・アンド・ビー)などの民泊システムも注目されていますし、若い世代の建築家たちは廃屋をリノベーションして用途を刷新することで、社会との新しい関係を構築し意欲的にコミュニティ形成に積極的に参加している動きもあります。こうした新しい変化の波に乗ることができれば、廃屋にならずに存続できるのではと考えています。

最近、新潟で空き家になる可能性のある案件が動き出しました。建て主にとっては、わざわざ故郷の佐渡から取り寄せた材木でつくられた思い入れのある住宅です。できれば地域に開かれた食堂付きシェアハウスなどに用途を変えて、なんとか存続させたいと企画しています。消費社会にあって、家の歴史や記憶を伝えていくことによって、建築のチカラが認識される良い機会ではないかと思っています。

「浦崎の家」(1984年竣工)　北側よりの全景、地下1階はガレージ

「浦崎の家」　西側のデッキテラスから調整池を望むことができる

抱負を語る

「ことば」と「スケッチ」のちからに学ぶ

窪寺弘行

2月17、18日に、長野県出身の建築家で2016年2月25日に逝去された宮本忠長先生の展覧会が、JIA長野県クラブの主催で松本市美術館にて開催されました。

展示された膨大な「スケッチ」と添えられたメモのような簡潔な「ことば」は、建築家として何を考え、何を訴えたく、何に迷っているか、そうした心理的な心の動きがにじみ出ているかのような心を打たれるものでした。

私たちが建築を考える過程でイメージやアイデアを用紙の上に描き、形にしていく行為が幾度となく繰り返されるとき、創り手の心の動きが無意識のうちに手を通して用紙のうえに軌跡として残されます。そのためにも、実際に存在するものを描き写す、スケッチという行為は、まさに設計の手を練ることにつながるのではないでしょうか。

「目を養い、手を練れ」とは、亡くなった宮脇檀氏の言葉ですが、「優れたものをたくさん見てスケッチをしなさい」との教えが思い出されます。CAD、CGで建築が創られてゆく時代だからこそ、人の手によって生み出されたものに心を打たれるのかもしれません。本来、人に見せるものではないので、うまい下手はどうでもよく、描くという行為そのものに意味があるのだと思います。

宮本忠長展を拝見して、あらためて「スケッチ」と「ことば」の持つちからについて、考えさせられました。これもひとつの「温故知新」かもしれません。

以前から私が描きためたスケッチの中から、1枚ご紹介させていただきます。

地元造り酒屋のスケッチ

抱負を語る

若かりし頃の自分への反省と誓い

井上雅宏

恥ずかしながら私は学生時代、ものづくり自体うっとうしく退屈に思う怠惰な性格でした。あまりに図面を描くことが退屈で、長い期間をかけて一式完成させる設計製図の課題などは数日前から手をつけ、たびたび遅れて提出するありさまでした。

しかし、設計実習という、週に1回、課題を作る授業があり、あるとき講師であった赤坂喜顕先生に私の作品を非常に評価していただいたことがありました。それは自分にとって一生忘れることができないような、感激すべき出来事でした。それ以来建築の魅力に引き込まれ、毎週徹夜してその課題を出すようになりました。設計実習は2年間続きました。だんだんとデザインのコツのようなものを掴み、コンスタントに評価していただけるようになりました。最終的に中谷礼仁先生の強力なプッシュのお陰でJIAの卒業設計コンクールで銀賞をいただき、伊東豊雄さんの事務所で学ぶ機会をいただきました。

現在の実務活動でもっとも自分の力となっているのは、学生時代の小品を短時間で繰り返し形にしたこの経験にあります。現在の消費社会の設計活動はその場の要求を直ちにデザインに着地させる連続だからです。

若かりし頃、私は根拠のない自信を持ったどうにも困った人間で、多くの方にご迷惑をおかけしました。今、自分と付き合ってくれた寛大な友人や諸先輩方に、このページを借りて謝りたい一心です。実務の直面する課題にひとつずつぶつかり、結果を残していくことこそが若かりし頃の怠惰な自分への反省になると考えています。

Flats TAHICO（2018.3）

KIYOSUMI Project（2018.3）

日本大学理工学部船橋キャンパス

―デザインとエンジニアリングの融合―

千葉県船橋市

第３回目の「バックヤードツアー」は、「普段は建物の表面に出てこないバックヤード（構造）を見学する」と、少し視点を変えました。建築家がイメージした造形をかたちにする構造デザイン、また、テクノロジーのもつ可能性を美しいかたちにする建築デザイン、未来のアーキニアリング・デザインを育てる教育システムを学びに、日本大学理工学部船橋キャンパスを訪ね、斎藤公男日大名誉教授の解説のもと、キャンパスツアーを行いました。

（『Bulletin』編集WG）

「テンセグリックトラスアーチ Type III」

日本大学理工学部建築学科の「空間構造デザイン研究室」では、「空間と構造をどのようにデザインすべきか」を研究テーマに、実践的な活動を行っています。斎藤公男氏は、建築学科の教授としてこの研究室を長年率いながら、数多くの構造デザインを手掛けてこられました。日本大学理工学部船橋キャンパス内にも、斎藤氏と研究室が建築家とコラボレーションをして実現した建物が多くあります。

2月27日、集合場所の船橋日大駅から順に、建物や試験体など11の構造物を見学しました。

「ファラデーホール」の天井

今回のバックヤードツアーのテーマは「構造」、そして「デザインとエンジニアリングの融合」という言葉を最初にうかがいました。今までインテリアの仕事が多く、構造になじみのない私でしたが、このバックヤードツアーで斎藤公男先生から構造について説明をしていただき、大変刺激を受けました。

10か所以上のポイントを見学しましたが、インテリアデザインの立場からは、天井材としての構造の美しさを感じたふたつをピックアップしました。

ひとつ目は、目を引き付けられる美しさの「ファラデーホール」（1978）の天井です。ちょっと思い出したのは、エーロ･サーリネンの「MITチャペル」でした。ただ「ファラデーホール」の円はとても大きく、その円形の天井の下に立つと宇宙という言葉が湧いてきて、構造とは関係ないのですが、*Man's Place in the Cosmos* という本を読んでみようかと思いました。

この天井を美しいと感じた理由は、黒い梁と金色のワイヤーの交差が眼前に広がり、中央のリングで緊張が保たれている様子が感じられたからです。私は構造に詳しくありませんが、車輪型張弦梁という構造が放射状のダイナミックな美しさを感じさせてくれました。それは、私がいつも考えている意匠上の仕上材料の工夫や展開図上での美しさとは別の物でした。

「ファラデーホール」（1978）の天井

ふたつ目は、「テンセグリックトラスアーチ Type III」（1997）です。テンセグリックトラス構造を調べてみると、大空間の屋根によく使われる構造のようですが、こちらの特徴は斜材を目立たせないで消してしまうようなイメージで考えられ、ターンバックルが使われていないというお話でした。斜材としての存在感がなく、全体を邪魔していないうえに、この8本のロッドは繊細でありシャープな印象を与えます。このシステムは「山口きららドーム」に使われているそうですが、こんな屋根構造に彩られた空間って素敵だと思いませんか。

「テンセグリックトラスアーチ Type III」（1997）

意匠担当者が何もかも理解する必要はなく、それぞれ設備・構造担当者と分業すれば良いといわれることがあります。しかし設備担当者が感じる美しさ、構造担当者が感じる審美性など、意匠に対しても独自の感じ方があるのと同じように、意匠担当者も構造に対するセンスを深めていかないといけないとこのツアーに参加して感じました。ツアーの最初にお話のあった「デザインとエンジニアリングの融合」に今日から少しでも近づけるようにしたいです。

（小倉史子）

「レストドーム」(1989)　屋外の集会場

「張弦アンブレラ」(2005)　「愛・地球博」のためにつくられた日除け用休憩シェルター

斎藤公男先生(右)と参加者で記念撮影

見える裏方

バックヤードツアーと聞き、最初は裏方や天井裏のようなそれこそバックヤードを見るものかと思っていましたが、なんと最初から最後まで表から見えるものを見るツアーでした。

まず初めに見たのは、今回の集合場所である「船橋日大駅」(1995)でした。これまでに何回か来たことはありましたが、今までは、変わった意匠の駅だなとしか感じていませんでした。ぱっと見た感じでは、ラーメン構造の接合部付近に赤く塗られたブレースが飛ばされている感じです。解説によると、骨組みとブレースによる緊張力の複合構造「スケルション」という一風変わった構造で無柱空間を実現しているとのこと。さらにブレースにはターンバックルがなく、6本のブレースに均等に緊張力がかかるよう、フェースジョイントという特殊な接合方法により常に均等に力がかかるようになっていました。

フェースジョイント
「船橋日大駅」(1995)

ここからは日大理工学部内にある建物をめぐりました。

実験棟である「テクノブレース15」(2002)は、膜屋根の張りを保ったままになるよう、スプリングばねが使われていました。

スプリングばね
「テクノブレース 15」(2002)

「理工スポーツホール」(1985)は、60mものスパンを飛ばすため、緩やかな勾配の架構材の下部にケーブルを張った張弦梁構造の屋根になっていました。しかも、狭い施工敷地の中でも組み上げられるよう屋根を3分割し、いったん地上で屋根を組み上げ、それを吊り上げ一体化した後、水平に移動させるスライド工法によってつくられたそうです。

「理工スポーツホール」(1985)

「先端材料科学センター」(1995)の目玉は、構造体ではなくガラスカーテンウォールでした。ここで考案されたMJGガラスファサードはガラスに穴を開けることなくプレートでガラスを支え、さらにケーブルワイヤーがテニスラケットのガットのように張られ、風が吹いた際にはテニスボールを打ち返すように“たわんで”打ち返す、一風変わった構造になっていました。実際強風の際は、怖いほど“たわむ”そうです。

MJG ガラスファサード
「先端材料科学センター」(1995)

最後は「ファラデーホール」(1978)です。正方形の室内に中心から円形に張弦梁を渡し、天井に綺麗な和傘の骨のような華が咲いた空間となっていました。矩形の壁面に円形の屋根を載せるため、8角形の梁が渡され、そこに掛けられたそうです。

「ファラデーホール」(1978)

大学内の建物ということもあり、どれも実験的な構造デザインの建物を多く見ることができました。実際に、構造体としてどこに問題があるかどうか等は実験により検討し、計算だけでは導き出せないものを実現させたそうです。また、どの構造体も意匠性だけでなく実際に施工した際の作業性や施工方法等も考えられ、十分に検討されたものだからこそ美しく感じられる構造体になっているように感じました。　(幾島太郎)

アーバントリップ実行委員会

第85回JIAアーバントリップ

「使い続ける住宅を訪ねてvol.2」に参加して

水沼淑子

今回の見学先は、東孝光の「塔の家」(1967年)、池辺陽の「石津邸」(1958年)、宮脇檀の「松川ボックス1期」(1971年)。1970年代に学生生活を過ごした筆者にとっては涎が出るほどの好企画！「塔の家」と「松川ボックス」は、掲載された『都市住宅』の誌面まで、まざまざと思い出せるほどである。また、「石津邸」は池辺陽設計「ケーススタディハウス」として建てられたという由緒以外にも、子ども室のオープンなあり方など、目を閉じていても平面図が浮かんでくる。

2月14日快晴。最初は「塔の家」である。学生には日頃、「建築は3次元、空間を知るためには実際に経験してみないとわからない」と話し、可能な限り見学に連れ出し建築体験を心がけている。その意味をこれほど如実に物語る住宅も他にない。玄関を入る。正面の壁が目前に迫る。が、壁に囲まれた空間は上へ上へと視線を誘い、存在感を放つ階段は一段一段が主張しながら縦に続く動線となる。うわぁ！空間だ！都市住宅だ！とベタな叫びが心の中に広がる。

私たちを迎えてくれたのは東利恵さん。この住まいとともに豊かな時間を過ごしてこられたご本人である。『「塔の家」白書』などでしばしばこの住まいについて語られてきた。今は、この住宅をどのように継承していくか新しい試みを準備中とのこと。文化財的な対応も含め、やれることは何でもやったほうが良い。築後51年。国登録有形文化財の資格は十分ある。この住宅がここにある意味は、東京にとって、日本にとって極めて大きいことは言うまでもない。この場にあり続けることが、この住宅の大きな使命である。

次は「石津邸」。言うまでもなく、あのVAN創設者石津謙介さんのご自邸である。迎えてくださったのは、現在の居住者で謙介氏の長男石津祥介氏とそのご子息塁氏。お二人とも実にかっこいい。モダンリビング社提案のもと、日本版ケーススタディハウスの第一作目として計画された。連続建ても可能なテラスハウス型の住宅である点、家族の生活の場となる吹き抜けの居間食堂を住宅の中心に置き、その延長上に夫婦の寝室、増設性を考慮した間仕切りのない子ども室の考え方。モダンリビングそのものである。これまで、何度となく平面を見て空間を想像してきた。当初の写真のインパクトに比べると、時を経て、住人によって住みこなされ、丁寧な増改築を重ねた分だけまろやかで味のある住宅に変身している。増改築の設計は宮脇檀、施工はなんとあのダイフミさんこと田中文男氏。やるべき人たちがやるべきことをして、今日ある住まいである。作り手と住み手、この見事な共同作業の成果が今ここにある。

最後は「松川ボックス」。設計者の宮脇檀さんの事務所で、この住宅を担当された石田信男氏が迎えてくださった。現在は著名なアートキュレーター清水敏氏が事務所として使用中。「松川ボックス」は3期にわたって工事が行われ、今回見学がかなったのは1期の住宅。RCと木造の混構造である。学生時代、都市型住宅が課題になると皆こぞって宮脇のボックスシリーズを参考にした。固い箱に柔らかい内部。内に向かって開く構成。宮脇が見事に解いて見せた都市住宅のモデルである。中庭を挟み対峙する付属屋との取り合いを見たかったと心底思う。

今回訪問させていただいた3邸とも、立地は都心の一等地である。建設後の東京の変貌を思うとき、今日まで存続できたことは奇跡ともいえる。大事に思う人がいて、大事に守り育ててきたからである。接するものに極めて強い印象を与えるのは、コンセプトの明確さであり、都市の時代にいかに住まうかを明確に形にして提示しているからに他ならない。叶うなら都市の時代といわれた20世紀の遺産として、その成熟していく姿を見守りたいものだ。好企画に心から感謝です。

塔の家（外観）

塔の家（内部）

石津邸

松川ボックス１期

災害対策委員会

JIA東京大会2018 4会議合同シンポジウム「環境・保存・災害・まちづくり」にむけて

災害対策委員会 委員長
松下 督

■JIAのBCP

2018年は、18,000人を超える死者・行方不明者が記録された東日本大震災から7年目になります。日本では数年ごとに震度7程度の大地震が発生しており、JIA災害対策委員会、JIA会員は被災地自治体と連携して被災地住民のための支援活動を展開してきました。

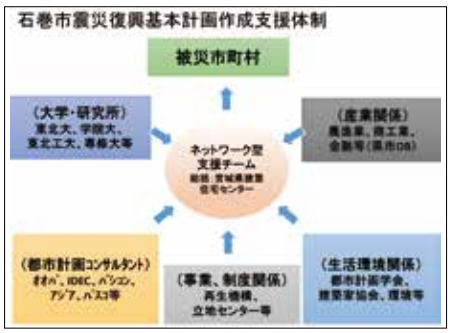
JIAはこれからも、災害に強いまちづくりや復興支援活動に積極的に参加することで、専門家集団としての社会的使命を果たしていくことになります。

■JIA東京大会2018 4会議合同シンポジウム

JIAは全国に10の支部、60あまりの地域会があり、委員会活動を行っています。環境・保存・災害・まちづくりの各委員会では、定期的に全国会議を開催し、JIA全国大会では4会議合同シンポジウムを開催しています。

JIA東京大会2018では、「ストック活用を環境・保存・災害・まちづくりの視点で考える」と題した徳島大会2017に引き続き、合同シンポジウムを開催します。

スキームづくり、作品づくり、技術提案の3つの分類で討議する予定です。多くの方にご来訪いただくようお願いします。



東日本大震災支援しくみづくりの概念図

東日本大震災 七ヶ浜町代ヶ崎浜地区災害公営住宅

都市・まちづくり委員会

より良い景観・まちづくりのために

都市・まちづくり委員会 委員長
亀井尚志

都市・まちづくり委員会では、より良い景観・まちづくりを行うために以下のような活動をしています。

2017年9月28日　第11回シンポジウム

まず、2009年より続けている土木分野（≒Built Environment）との協働活動として、建設コンサルタンツ協会との協働シンポジウム「誰が景観を創るのか」の第11回をJIA徳島大会2017に合わせて開催しました。今回は、東工大の真田純子准教授に「これからの農村のあり方～環境・土木・建築・農業・観光」をテーマに基調講演をお願いし、参加者と意見交換を行いました。農村風景の捉え方について、農業は地域環境と密接に結びついており、持続可能な土地利用が美しさの要素であったというお話がありました。

六鹿会長と村田会長の対談

この土木分野との協働の一環として、建設コンサルタンツ協会の村田会長とJIAの六鹿会長の対談を2月に行いました。両会長からは土木と建築が初期段階で調整できない現行制度の問題点等が指摘され、これからは公共主導のまちづくりから民間主導のまちづくりへとシフトするため、ますます土木と建築の協働が求められるという認識が示されました。またそのためには、教育や制度、設計基準が異なる両分野の人材が活発に議論し、協働できるプラットフォームづくりが提案されました。

他には、建築五団体や地方公共団体で構成する「景観まちづくり協議会」のWG委員会に委員を派遣し、良好な景観形成を推進する活動を行っています。協議会で作成した自治体向けマニュアル「景観デザインレビューのススメ」に基づき、ここに示された仕組みを解説する「デザインレビューガイダンス」の開催について、首都圏の地域会と調整を進めています。

交流委員会

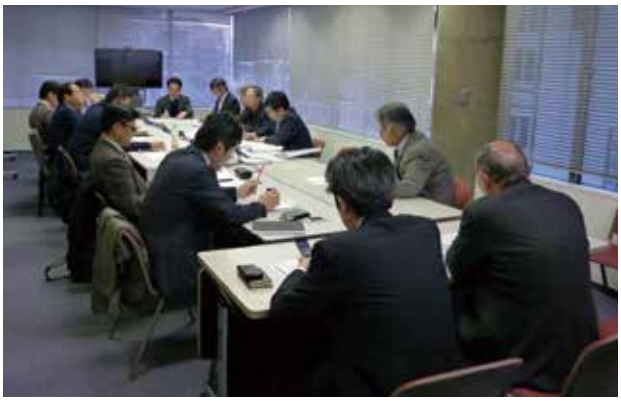
議論してきたことを実行に移す年に

交流委員会 委員長
河野剛陽

交流委員長を任されて丸2年になりました。交流委員会は、「JIAの目的に賛同する法人および個人」(協力会員)と数名の正会員で組織されており、正会員数名が委員となり、業種別に7つのグループで構成されています。昨年度も交流委員会では、正会員との交流を図るべく、懇親ゴルフコンペ、建物見学会、セミナー等さまざまな催しを行いました。参加者は、そこそこ集まるものの、交流委員会の内部のイベントの感が強くなっていました。JIA関東甲信越支部の会員または、外部の方々に興味を持って参加いただけるように広報の方法も考えましたが、期待したほどの集客はありませんでした。

今年度は、昨年までに議論してきたものを実行に移す年にしたいと考えています。本来は、ともに協力してJIAを盛り上げていくという形が理想であるにもかかわらず、実態は別々の活動を行っているような状態でした。そこで、協力会員のほうから、各委員会に積極的に参加できる環境を整備していきたいと思います。正会員主催の活動に参加することにより、正会員と接する機会を増やしていければと考えています。接点ができれば、交流委員会のイベントの開催の情報や内容を口コミで伝えることができ、より参加を促せるのではと期待しています。

今年は、9月にARCASIA東京大会およびJIA建築家大会東京が開催されます。そこに向けて、何か実行に移すことができればと考えています。会員の皆様、ご理解ご協力お願いいたします。



交流委員会幹事会

交流委員会 Gグループ

マイケル・グレイブス設計のショールーム見学会

交流委員会
法人協力Gグループ長
深滝准一

Gグループは、情報開発部会と合同で月1回会合を開き、主にIT関連の勉強会や建物見学会等を行っています。今回は、昨年12月に行った見学会の内容を報告します。

マイケル・グレイブス氏は、ポストモダン建築を代表する建築家の一人で、日本国内にも作品を残されています。その中のひとつに「田島ビル」があります。田島ビルは、1994年に田島ルーフィング㈱の本社ビルとして東京・秋葉原に建設されましたが、2015年10月に1～3階を体感型ショールームに改装し、昨年11月に4階を防水のコーナーにリニューアルしました。そこで、築23年経過したポストモダン建築とリニューアルしたばかりの体感型ショールームを見学しました。

はじめに建物ですが、築23年の古さはまったく感じませんでした。シンメトリーとスクエアグリッドがテーマとなっており、リニューアルの際もなるべく当初のコンセプトを壊さないよう行ったとのことです。

1階は、床材や防水材の歴史が展示されており、普段何気なく使っている「Pタイル」という名称は、プラスチックタイルの略だと思っていましたが、1953年に「プラスタイル」という名称で発売したアスファルトタイルだということを初めて知りました。2階は床の機能体験ができるフロア、3階は床材のショールームとなっており、さまざまな床材の組み合わせなどもシミュレーションできるようになっています。特に4階は防水の仕様がわかりやすく展示してあり、仕事をし始めた若い設計者は、一度見学すると防水の理解が深まると思いました。

見学会終了後は、近くの「フレンチ食堂」にて懇親会を行い、楽しく、そしてためになった勉強会でした。

今年もさまざまな勉強会を企画しますので、興味のある方は、ぜひご参加下さい。

見学した田島ルーフィングの本社ビル（東京・秋葉原）

FORUM

住宅再生部会

参加型セミナー 2題

住宅再生部会 部会長
宇佐美 潔

今年度の部会ツアーは、参加型セミナーの形にして多くの方々に参加していただきました。

ひとつ目は、6月の部会講演「法師温泉長寿館の保存と再生」で講師をしていただいた石川純男氏が、10月にともに1泊して現地を案内してくれたものです。日本屈指の秘湯であり、140年の歴史と文化を現在まで伝える名湯です。この温泉宿は国登録有形文化財に指定され、上信越国立公園内にある環境も保存されている貴重な建築です。歴史ある建築の増改築がどうなされたのか、現地で実物を見ながら石川氏に再度解説いただき大変貴重な体験を得ました。

ふたつ目は、11月に副部会長の大沢悟郎氏の尽力で可能になった神奈川県の葉山町にある吉阪隆正氏が設計した数少ない住宅（三澤邸：1985年完成）の見学です。見た瞬間に「こんな住宅があるのか！」しかも案内をして下さったご家族全員が完全にこの住宅を愛しているのを感じました。見学をしながら三澤様からの説明で知らされたのは、総工費が決まっていない状況に加えて10年にわたる工事期間にU研究室のメンバーが常に10人くらい泊りがけで設計し施工が進んでいったそうです。クライアントと建築家の信じがたい信頼関係があって実現した、奇跡的な住宅なのでした。

法師温泉長寿館の
囲炉裏端にて。
後ろの右が石川さん

三澤邸
三澤さんご家族と一緒
にテラスで記念撮影

情報開発部会

活動報告

情報開発部会 部会長
天神良久

情報開発部会は、部会設立時のCAD・CGなどの利用技術の情報発信から始まり、昨今では話題のBIM、スマホ、モバイル端末、GIS、環境問題、健康談義？等々調査範囲を拡大し会員間での情報共有を推進しています。

年間の活動は、月1回の勉強会の開催と、年2回の見学会・イベントの開催です。勉強会の講師は、専門家をお呼びして話してもらう会と、会員自らが調べた情報を披露してもらう会があります。

2017年度の交流委員会Gグループと合同での勉強会では、「省エネ計算ソフトSAVEシリーズの機能」、「マルチツールが生み出すこれからの設計環境とは」、「東北震災復興状況現地調査報告」、「建築設計・監理業務委託契約におけるCADデータの扱いについて」、「地域活性学会「公共ROAとAIの試行利用」論文」、「FMで利用するICTシステム」、「オフィスサーベイシステムの考え方とロジック」、「アセットマネージメントと不動産クラウド」などを開催しました。また、8月には初の試みとして「情報開発部会とGグループの合同ゴルフコンペ」を開催し、8名が参加し、天候にも恵まれ少し遅い夏休みを佐野GCにて満喫してきました。

深滝会員作成のドラコン・ニアピンフラッグ

12月の見学会では、田島ルーフィング東京ショールーム（秋葉原：マイケル・グレイブス設計）を訪問し、最新の防水技術、床デジタルフイルム「オリフィ」、マルチスペースにて照明と床材のワークショップを体験しました。

情報開発部会では新会員を募集しています。JIAホームページで部会の日程を確認してお気楽にご参加ください。

田島ルーフィング
見学会集合写真

埼玉地域会

活動報告

埼玉地域会 代表
村田行庸

■200秒スピーチ

今年度より地域会の代表に就任し、毎月の役員会後に新たに懇談会を開くことにしました。まずはお互いのことをよく知ろうという目的で、渋谷地域会のアイデアをヒントに200秒スピーチを行っています。参加者は会員に限らず幅広く募集し、プロジェクターを使って1人200秒で全員に自由なテーマで話をしてもらいます。それぞれの趣味や仕事、考えなどが日々の生活のヒントとなり良い刺激となっています。

■公益活動

ものづくりワークショップ(『Bulletin』2018冬号、p.12に掲載)、大宮・川越での毎月の建築相談、他団体との協働事業等、地域に根ざした活動を継続的に行ってきました。

■今後の展望

JIAは地域ごとに活動状況は大きく差があるようです。埼玉県では他県と異なる設計団体事情として、埼玉建築設計監理協会という専業設計事務所の大きな団体があります。官庁案件に携わる事務所の多くの建築士が会員となり、自治体や他団体との連携を深めています。

一方、JIA埼玉に所属しているのは民間建築を中心に携わる方々です。JIA埼玉としてサロン的情報交換や地域貢献を中心に活動を進め、独自性を強めるか、埼玉県の設計業界として他団体と連携を深め官民ともまとまった活動を進めていくか、今後の方向性を選択する必要があると考えます。

懇談会の200秒スピーチの様子

千葉地域会

継続と成長

千葉地域会 代表
榎本雅夫

毎年3月に開催している千葉県建築学生賞が今年で30回を迎えました。作品の展示、審査だけではなく、一生の思い出となるであろう卒業設計を通して学生と建築家が熱心に語り合う場は、当事者はもちろん、そこに集う多くの人々にとっての自己啓発の機会として新鮮な空気に包まれます。先輩諸兄や関係者のご尽力により、回を重ねるごとに内容も多様化し、地域に密着したイベントとして欠かせないものとして成長し続けています。

これまでの出展者でつくる「なの花会」は学生賞OB・OGの同窓会として交流が図られ、現在では「なの花会賞」も設けられ、イベントをより多彩なものにしています。また、県内工業高校建築設計作品展を併催するなど、建築づくりに関する興味をより幅広いものにしています。

「百科シリーズ」として毎年9月に開催している講習会は、会員や市民のニーズを反映した課題を取り上げています。専門分野やタイムリーな情報等について、千葉県の担当部署の方々や法人協力会員による講演をいただく研鑽の場として定着しています。前回は、補助金制度の活用をテーマに実施しました。

1月には新年の賀詞交換会に併せて講演会を行っています。今回は会員有志によるリレートーク「私が大切にしていること」を開催しました。設計の過程において交錯する作者のさまざまな思いが作品スライドと重なり合いながら感じられ、空間を生むことの大切さ、楽しさを再認識する機会となりました。

「なの花会」紹介ホームページより

神奈川地域会

建築フォーラム、建築祭の二本柱で活動を展開

神奈川地域会 代表
飯田善彦

神奈川地域会ではこれまで3年間やってきたさまざまな研究会、会員発掘のトークギャラリーなどを一旦整理し、2016年度2月に催した「かながわ建築祭」の盛況を今年度につなげるため新しい企画にチャレンジしたいと考えた。その実現の一環として、昨年10月27日～29日の3日間、第1回JIA神奈川建築フォーラムと称し「都市木造が暮らしとまちを変える」というタイトルで、ちょうど建築祭に先立つこと半年、期間、内容とも建築祭に応答する夏バージョンイベントを開催した。都市木造をテーマにしたのは建築そのものに向き合おうと考え、ちょうどさまざまな文脈で転換期にある「木造」をJIA神奈川メンバーで学習・共有し、さらに横浜の公共都市施設を木造で作る提案ができないかと勝手に夢想した結果である。このためすでに連携協定を結んでいる横浜市建築局とも話し合い、同時にこの分野で先駆的に活動し実現に取り組んでいる建築家集団team Timberizeにも相談し、結果として、JIA神奈川、横浜市建築局、team Timberize、3者の共催を実現した。資金調達のためメンバーのネットワークをフル活用し、耐火木造に関わる企業、横浜市の団体等これからの展開に関係するであろう対象に協力を求め、約200万円の予算を確保した。場所も建築祭同様みなとみらい線馬車道駅コンコースを会場として借り、市民の目を惹く乗降客動線のすぐ横で3日間すべてのシンポジウムと展示を実行した。

2月の建築祭は、このフォーラムのテーマを引き継ぎ「木がつくる豊かなまちの風景」をテーマに行った。前回に引き続き神奈川学生卒業設計コンクールに関連した7大学指導教員シンポジウムを皮切りに、やはり第2回となるデザインアワードを、伊東豊雄さんを審査委員長に迎えて開催し、テーマに沿ったメインシンポジウムを内藤廣さんの基調講演を交えて催すなど、かなり充実した内容であった。今回も4人が新たに入会している。

これからも建築フォーラム、建築祭の二本立てを柱に、行政へのさまざまな提案や市民に対して建築の面白さや重要性、建築家の多彩な活動や意見を伝える活動等を展開していきたいと考えている。

茨城地域会

2017年度の活動

茨城地域会 代表
河野正博

2017年9月に水戸市の中心市街地で第6回の「水戸まちなかフェスティバル」が開催され、茨城地域会は恒例となった歩行者天国区間の中央付近で、1／500の水戸地形模型に自由に建物を作ってもらう、参加型ワークショップ「みんなで水戸のまちをつくっちゃおう」を出展しました。毎年参加者が増え、本年も昨年の倍以上の素材を用意しましたが、それでも足りなくなるぐらいの盛況ぶりでした。

また、会員の作品を展示する「会員作品展」も同時開催し、多くの市民の皆様に会員の作品を見ていただくことができました。

2018年2月2日～8日には、ニューヨークでの例会を開催しました。茨城地域会では2年に一度海外での例会を実施しており、今回はメトロポリタン美術館、グッゲンハイム美術館、近代美術館（MoMA）、ホイットニー美術館、そして、ニュー・ミュージアムのニューヨークの5大美術館を主に視察してきました。ニュー・ミュージアムは一番新しく、茨城県出身の建築家 妹島和世氏による設計の美術館です。

残念ながら、楽しみしていたグッゲンハイム美術館とニュー・ミュージアムは展示切り替え中でほんの一部しか見学することができませんでしたが、毎食アメリカらしい素敵な食事と世界一の摩天楼を体験できたことは何よりの思い出となるとともに、会員同士の親睦も深まり大変有意義な例会となりました。

それ以外にも（公社）日本建築学会関東支部会茨城支所との共催で、松岡恭子氏を招聘しての建築文化講演会や民家とまちなみウォッチングを開催しています。

参加型ワークショップ「みんなで水戸のまちをつくっちゃおう」

作品づくりだけでなく、環境・保存・災害・まちづくりに建築家の能力を使う意味

JIA 建築大会 2017 四国、4会議合同シンポジウムを通して

JIA まちづくり会議
議長
連 健夫

昨年の四国大会において、シンポジウム「ストック活用を環境・保存・災害・まちづくりの視点で考える」が行われた。これはJIAの4会議合同主催で、毎回のJIA大会時に行われている。四国大会での副題は「空き家・空き地問題解決！どう活かすか！」。150名を超す参加者の中、熱いディスカッションとなった。

■分野横断的視点が大切

このシンポジウムの目的は、①JIA内で各委員会の活動は活発であるが、分野横断的展開が弱いので、それを繋げる意味、②ストック活用は大切なテーマで、それをどう捉え、どう手立てをするかについての実効性のある方法を得る、ことである。

プレゼンテーションとして、「環境」からは袴田喜夫氏が「残したい、取り戻したい大きな環境」について四国剣山系の自然を例として、ストックを「良好な環境」として捉えることの大切さを指摘した。「保存」からは篠田義男氏がストックを活かす仕組みとしてJIA文化財修復塾の説明と全国各支部連携事例として、歴史的建築物活用における建築基準法3条適用の可能性について言及された。「災害」からは芳賀沼整氏が、東日本大震災時に仮設住宅を再利用前提に設計された事例紹介とともに、各地域に合った多様な再利用メニューの必要性を指摘された。「まちづくり」からは亀井尚志氏がリノベーションまちづくりの視点を400m、徒歩5分のスモールエリアで捉えることの大切さを事例を通して指摘した。筆者は、英国CABEの事例を挙げ、良質な建築、美しいまちづくりはデザインレビューなど協議調整の仕組みづくりがポイントであり、そこにデザインのできる建築家が関わることが大切であることを指摘した。

コメントとして小玉祐一郎氏は、気候風土を捉えることの必要性、建築環境賞など優れたものを奨励する仕掛けの有効性を指摘した。原眞佐実氏は保存再生において悩ましいのは経済性の観点であり、理想と現実との折り合いをいかにつけるかがポイントであると指摘した。松本純一郎氏は、災害時活動について、行政対応を含め、既存制度について理解することの大切さを指摘した。

ディスカッションでは、空き家空き地は、都市と郊外とは状況が異なるので分けて考える必要がある、何を残して何を継承するかについてさまざまな立場の人を巻き込んで議論する必要がある、材料における地域性は常に意識する必要がある、実効性ある活動にするためには他団体との連携が必要である、協議調整の仕組みを作るには行政との信頼関係構築が前提、などが議論された。

■公益的活動に関わる意味

建築家の職能として、建物の設計という作品づくりがあろう。建築設計は建築、設備、構造との調整、施主や施工者との調整役を担う中で、建築概念を具現化する職能といえる。この調整能力を建築設計のみならず、公益的活動に使うことが求められている。

このシンポジウムの目標は、既存ストックを地域資産として捉え、それを世のため人のために、うまく活かしていくことである。それを実効性のあるものにするべく各分野から分野横断的視点、他団体の連携、行政との関係、建築家の能力を活かすための仕組を論じているのである。この内容は常に公益性をベースにしており、作品づくりの技術を論じているのではない。ここには、建築家の能力を公益性のあるものに使うことにより、良質な建築、美しいまちづくりになるとの共通理解がある。もちろん建築家の能力と時間を使うのであり、適切な報酬が必要なことは言うまでもなく、その仕組みをつくることも併せて求められている。

次回、JIA建築家大会2018東京で、当4会議合同シンポジウムは、重要プログラムとして9月15日の午前にアレンジされた。ぜひ、多くの方にご来訪いただきたい。

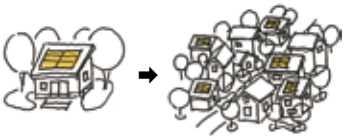
JIA 建築大会2017四国、4会議合同シンポジウム

エネルギーの小屋：えねこや

—地域に「えねこや」を増やして 災害に強いまちづくりへ—

湯浅 剛

■えねこやについて



点から面へ

「えねこや」は、自然の力でつくったエネルギーだけで心地よく過ごせる「エネルギーの小屋」のことです。太陽光発電と蓄電池による電力自立（＝オフグリッド）を前提に、少ないエネルギーでも快適かつ健康的に過ごすために、建物規模を抑え（小屋化）、断熱気密性能の向上と省エネ機器の採用、太陽や風などの自然エネルギーと再生可能な木質バイオマスを最大限活用して、CO_2排出量完全ゼロを目指します。

2016年6月、えねこやの普及を目的に「一般社団法人えねこや」を仲間とともに立ち上げました。えねこやをカフェやギャラリー、子育てや高齢者のサロンなど、半公共空間として地域に開き、さまざまな活動や参加型イベントを通して「エネルギー多消費型の暮らし」から「持続可能で豊かな省エネルギー型の暮らし」へと発想の転換を促すことを目的としています。また災害時の拠点として、えねこやを地域に展開していくことで、災害に強いまちづくりの実現を目指します。

■えねこや六曜舎について

2016年6月、調布の深大寺で築40年の空き家を減築リノベーションして、えねこやの第一号となる事務所兼用住宅「えねこや六曜舎」をつくりました。ベタ基礎化（基礎断熱）、耐震補強、温熱改修を施し、トリプルガラスの断熱サッシや木製断熱サッシを採用することで、外皮性能をZEHレベルまで向上させています。構造材と外装材には高知県産の土佐杉、内装には長野県産のカラマツと、国産材を活用。切妻だった屋根を片流れにして3kWの太陽光発電パネル（12枚）を載せ、安価なフォー

えねこや六曜舎
外観

えねこや六曜舎　内観

蓄電池（コントローラー、インバータ）

クリフトのバッテリー（鉛蓄電池／18kWh）を組み合わせて、電力会社からの電力をひかないオフグリッドを実現させました（蓄電池協力：自エネ組）。ガスもひいていないので、コンロはIH、お湯は太陽熱温水器のみですが、年間7割以上の日数で40度となるので、お風呂やシャワーも十分に使えています。発電容量が落ちる冬場の暖房には、友人が開発した重力式の無電力ペレットストーブ（薪兼用）を採用し、曇りや雨の日には、木質バイオマスのエネルギーに頼っています。

工事期間中には、珪藻土左官ワークショップや、人力井戸掘りワークショップを開催するなど、多くの友人や地元調布の知り合いにも関わってもらいました。また完成後は、見学会やセミナーを何度も開催し、また新聞やWebでもご紹介いただくことで、「えねこや」も少しずつ浸透してきたかなと感じています。

■これからの展開

電力自立の小型版となる「えねこや屋台」をつくってイベントに参加したり、セミナー企画や出張セミナーへの参加など、今後も啓蒙活動は続けていきますが、まずは「えねこや2号」の実現を目指しています。空き家の改装版になるか、モバイル小屋になるのか、まだわかりませんが、必ず近いうちに実現させたいと考えています。多くの人に関わっていただきながら、さまざまな楽しい仕掛けを通して、省エネや再生可能エネルギーの普及を促進し、原発や枯渇エネルギーに頼らない安全で持続可能な社会づくりに寄与できればと考えています。

告知

JIA建築家大会2018東京

2018. 9.13（木）—15（土）

今年9月に開催される「JIA建築家大会2018東京」、大会実行委員会からのお知らせです。

●大会テーマ

素なることと多様な相

Simplicity｜Multiplicity

単純な形や単位から多様な空間を構築していく方法論は、現在では流行を超えて、すでにスタンダードとなりつつあります。

これを高次に捉えれば、いま手に入る材料と技術だけでさまざまな用途や規模の強くて安全な建築を考える我々の普遍的な職能も、この関係性の相似形といえるでしょう。

「素なることと多様な相」とは、同時開催されるARCASIAのテーマ「Simplicity｜Multiplicity」の邦題であるとともに、そうした現代的な設計手法と、立ち戻るべき建築家のありかたとを重ね、3つの意味が込められた、全国大会のメインコンセプトです。

IT技術で地方との情報格差もほぼ解消された東京における14年ぶりのJIA建築家大会と18年ぶりのARCASIAの同時開催にあたっては、東京の地域性よりむしろ、建築家の職能やJIAの存在意義そのものを大きくテーマに掲げ、これらを見直す絶好の機会にしたいと考えています。

●大会スケジュールが決まりました

「JIA建築家大会2018東京」のメインプログラムは、9月14日㈮・15日㈯の2日間です。また、同じ週に開催される「ACA18 Tokyo（アルカジア東京大会2018）」と連携しており、JIA建築家大会に登録のJIA会員は、13日㈭のACA18プログラムから参加することができます。

プログラムの詳細は決まり次第、JIA建築家大会のサイト（公開準備中）に随時掲載いたします。今後はそちらをご覧ください。

大会スケジュール

ACA18 Tokyo			JIA建築家大会2018東京		
9/10～12（月）～（水）	9/13（木）	9/14（金）	9/15（土）		
ACA18 Tokyo	9:00–9:45 開会式（同時通訳付）※	9:00 基調講演3（同時通訳付）※	募集企画・展示（終日）	9:00–12:00 全国会議 合同シンポジウム（環境・まちづくり・災害・保存等）［アカデミーホール］	募集企画・展示（終日） エクスカーション
	10:00 基調講演1（同時通訳付）※				
	11:00 パネルディスカッション（同時通訳付）※				
	12:00	12:00 閉会・引継式（同時通訳付）※			
	13:00 基調講演2（同時通訳付）※	13:00–15:30 基調講演4「Simplicity｜Multiplicity」～素なることと多様な相～（同時通訳付）［アカデミーホール］		13:00–16:00 〈企画1〉（予定：公共工事実施コンペ公開審査）［アカデミーホール］	
	14:00 パネルディスカッション（同時通訳付）※				
	15:00 テーマセッションⅢ パネルディスカッション（同時通訳付）※				
	16:00	（移動）「建築の日本展」鑑賞［森美術館］		（移動）	
	18:00–22:00 Friendship Night［ニューオータニ］	18:00–20:00 レセプションパーティー 大会式典［グランドハイアット東京］		17:00–19:00 〈企画2〉（予定：若手セッション＋クロージングパーティー）［建築家会館大ホール］	

JIA会員はJIA建築家大会への登録で「※」のACA18プログラムに参加できます

［メイン会場：明治大学駿河台キャンパス］

BACKYARD

腰痛からのプレゼント

70歳を前に脊柱管狭窄症でダウンした。40代に何度かヘルニアで入院をしたことがあり、腰痛との付き合い方を知っているつもりでいた。が、今回の脊柱管狭窄症の激痛は神経ブロックも効果なく、消炎鎮痛剤のみに頼って、3週間身動きひとつできずに凝り固まった状態で過ごした。痛みが少し和らいでから運動療法とAKA治療で半年かけて半日仕事ができるまでに回復した。それでも、間欠性跛行状態で100メートル歩くのがやっとであった。

そのような折、運動科学総合研究所 所長 高岡英夫著『「本物の自分」に出会うゆる身体論』を読んだ。この本で提唱している「ゆる体操」のうち「基礎ゆる」、「寝ゆる」、「息ゆる」を実践して、脊柱管狭窄症はかなり改善された。この理論は身体が赤ちゃんのように「ゆるんでいる」状態を理想の状態としている。身体の約6割は水分、すなわち血液、リンパ液、細胞間液、細胞内液などである。その水分をベースに代謝が行われ、生命が維持されている。「ゆるむ」とは辞書に「固まったものが水分を含んだりしてやわらかくなること」と説明がある。身体は日々の生活で筋肉が固まり、塊になっていく。背骨周りの筋肉が固まると脊髄神経全体を圧迫することになる。脊髄神経は内臓すべてを支配している。筋肉が固まり、委縮すると血液循環のポンプ機能が低下し、身体の代謝が悪くなる。代謝が悪くなると脳をはじめ身体の活動が低下していく。

加齢によって、当然「ゆるみ度」は低下していく。この「ゆるみ度」の低下を遅らせ、「ゆるみ度」の高い身体と脳を維持することはアンチエイジングの本質である。「ゆる身体論」は、アンチエイジングを可能にする理論であると考えている。

「ゆる体操」を実践し続けるうちに、自然と身体を構成しているすべての骨や筋肉や臓器を意識するようになり、自分をメタ認知する習慣もついてきた。また、「ゆる身体論」の構成要素それぞれが「ゆるい」関係性を保って総合的に影響し合い有機体を維持するという理論は、建築、まちづくりに通じる理論である。

以上、「ゆるい関係性」を主要テーマに考えだしたことが、腰痛からのプレゼントである。

（阿久津新平）

今年のお花見は　編集後記

■3月末の週末に島根県に行ってきました。春は花見、秋は紅葉を車窓から楽しむことができたJR三江線が3月末で廃止になり残念です。（八田）

■JIAの建築家を中心に、ある建築家を偲んで「葉桜会」と称して墨堤の近くのお茶屋で花見を開催しています。今年で26回（震災の年を除く）になります。伝統文化を満喫する素晴らしい会です。（立石）

■人混みが苦手なので、4月後半に山登りで花見を楽しもうと思います。（長澤）

■この良き季節、花粉との闘いで何年もお花見とは縁がありません。今日も完全防備で現場に通います。（上原）

■毎年花見をしたいと思っているのに、なかなかできない、今年こそは！（古谷）

■ほんのり咲き出し、あっ、お花見！と祝日を楽しみにするも、雪。今年も引き続き、いろいろある年なのかなぁ……。（有泉）

■ちょっと前まで「花見」を楽しみにしていましたが……春の寒さが身に染みる今日この頃です。（中山）

■毎年恒例の設計したクリニックの屋上でのお花見パーティー。日頃会えない職種の人々との交流がとても楽しみです。（会田）

■我が家の庭に4年前に植えた桜が、今年開花しました。毎年、蕾も付けないで心配しましたが、ようやく花見ができます。（中澤）

編集　：公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長　：市村宏文
副委員長：長澤　徹
委員　：会田友朗・有泉絵美・小山将史・清水裕子・中澤克秀・中山　薫・古谷俊一・吉田　満
編集長　：長澤　徹
副編集長：小山将史
編集ワーキングメンバー：有泉絵美・中山　薫・八田雅章・立石博巳・会田友朗・上原和彦・古谷俊一・吉田　満
編集・制作：南風舎

Bulletin 275　2018 春号
発行日：平成30年4月15日
発行人：浅尾 悦子
発行所：公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291㈹　Fax：03-3408-8294
印刷：株式会社 協進印刷

■JIA関東甲信越支部関連サイト一覧
・（公社）日本建築家協会（JIA）　http://www.jia.or.jp/
・建築家online（一般向け）　http://www.jia-kanto.org/
・JIA関東甲信越支部（会員向け）　http://www.jia-kanto.org/members/

■ 定価 300円＋税／会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2018

INAX

人間の、かたち。

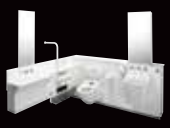
パブリックトイレの形状を一から見直し、人が自然に近寄りやすい形状に。
人が使いやすく、建築にも合わせやすいLIXILの新しいパブリックトイレ。
NEW PUBLIC TOILET HL。

使う「人」から発想した誰にとっても快適な、人間の気持ちにいちばん近いかたち。
「人間のかたち」から生まれたLIXILの新コンセプトは立ち止まることなく、
パブリックトイレの次のステージへ。

HL

NEW PUBLIC TOILET

パブリック向け壁掛便器



多機能トイレパック

センサー一体形ストール小便器

マーベリイナカウンター/シェルフ一体タイプ

多目的用途手すり（L型）

サウンドデコレーター（トイレ用音響装置）

LIXIL Link to Good Living

お客さま相談センター 0120-179-400 受付時間：平日 9:00〜18:00 土・日・祝日 9:00〜17:00

LIXIL HL 検索